【梗概】

『大功艶書合（たいこうえんじょあわせ）』は、天明七年（1787）十月十九日、『彦山権現誓助剣（ひこさんごんげんちかいのすけだち）』（天明六年十月竹本座初演）の続編として、竹本万作座で初演された九冊構成の浄瑠璃である。角書に「瀬川采女さま参るきくより／貴田孫兵衛さま参るそのより」とあるように、久吉の三韓攻めにまつわる加藤・小西の軍功争い、久次の家臣瀬川采女と菊、加藤正清の家臣貴田孫兵衛と園菊の話に、岸沢判官の悪事等を取り合わせたものである。初演時には、『彦山権現誓助剣』でお園を遣った二世吉田文三郎が園菊・傾城蘭麝・小西行長を、六助で評判を得た二世吉田文吾が貴田孫兵衛・真柴久次らを遣うという当代を代表する人形遣いの配役であった。再演以後も複数の上演があり、歌舞伎でも上演され、興行的に成功した作品といえる。成功には作者芝屋（司馬）芝叟の力もあろうが、当代一の人形遣いの名手吉田文三郎が、大成期に入った豊竹麓太夫の役場「園菊砦の段」で、女主人公園菊を遣ったことに人気の要因があろう。

また、文化八年（1811）正月の稲荷芝居で、「文楽」として確認できる最初の興行番付の演目が『大功艶書合』であって、本作は浄瑠璃興行史の観点からも注目すべき作品であろう。

【粗筋】

（金京欄『日・韓語り物文芸における女性像と担い手たち―「堤上」説話・「まつらさよ姫」から『沈清歌』まで―』2005年より）

一冊目　文禄初年の春、久吉の三韓出陣の門出を祝う酒宴が行なわれる場で、主計守加藤正清と対馬守小西行長は大領久吉より先陣を言い渡される。ところが、加藤正清は相役の小西行長を商人あがりの骨なし者と嘲弄し、両将の争いになる。そこへ、小西行長の父親の小西如清が三韓の地図の入った箱を持参し、それが両将に渡される。

二冊目　和泉堺の浦では加藤軍が、出船の用意の最中である。ところが、加藤正清の奥方の縁者山口監物・軍蔵兄弟は岸沢判官信親と組んで、小西行長を味方につけて、加藤正清を滅ぼし、ついには日本を亡ぼそうと企てている。そのため、加藤正清には偽の三韓の地図が入った箱を渡したのであった。一方、貴田孫兵衛（毛谷村六助）は、朝鮮征伐の先陣の指揮役を任されるはずだったが、妻の園菊が同行したいと願い出たため、加藤正清からは夫婦共に日本に残って久次を守護するよう命じられる。しかし、貴田孫兵衛はどうしても出陣を果したく一旦乗船するが、もとの岸に戻される。それは、その名に、朝鮮征伐に加わると、凶事があるとの占いがあり、それを防ぐための加藤の密書によるものであった。

三冊目　父親の大領久吉が名護屋に出陣して間もないというのに、息子の久次は高台寺で百姓権兵衛と草鞋を打つことで日を送り、今日は八朔の酒宴を開き、艶書合を行なっている。そこへ岸沢判官信親と北の方小萩御前（岸沢の妹）が諫めに入る。しかし、権兵衛によって岸沢判官らの謀反が発覚し、北の方は自害し、岸沢は久次の仁心（実は、御旗の詮議をさせるため）によって許され、その場を退く。権兵衛は実は三韓の忠臣晋伯の子で、五歳の時、父親が三韓王の逆鱗を蒙り、父親に伴われて日本へ渡り、久吉に奉公していた。が、父晋伯はその後疑いが晴れ三韓へ帰ることになり、権兵衛は二君に仕えないとの決意で、日本に居残っていた。ところが、父親に刃向うことになる久吉の三韓征伐の兆しを感じ、忠と孝とに迷い、久吉の許を退身していたが、百姓権兵衛と名乗って、久次に付き添っていた。権兵衛は久吉の許を退身する時、生まれたばかりの娘に千鳥の香炉を添えて捨てている。

四冊目　三韓に渡った加藤正清・小西行長は王城に向かって三韓関を乗っ取っていくが、金海道の率いている河陽関は小西行長が先陣をとる。小西行長に先陣を取られた加藤正清は渡された三韓の地図が偽物であることに気付くが、途中で小西行長の落とした地図を拾い、王城の先陣をとる。加藤正清に先陣を取られて小西行長が自害しようとするところを、加藤正清が留める。両将の先陣争いを仕組んだのは岸沢判官らの陰謀と知った小西行長は、加藤正清に先陣を任せ、岸沢判官の陰謀を暴くため日本へ向かう。

五冊目　蘭麝（らんじゃ）は故あって傾城になっている。父親の三韓国関帝堂の天元居士（李如松）が、日本勢に対抗するため、娘の蘭麝を傾城にして優れた武将を味方に入れようとの計画である。蘭麝は、天元居士から軍術の奥義を得ようとする八百屋陵雲と恋仲になる。一方、居士は霊夢を見、日本を退ける者に武芸の奥義を伝授しようと門弟たちと密議をする。それを盗み聞きした陵雲が自分も加わりたいと申し出るが、拒まれる。そこへ蘭麝が現われ、陵雲の出陣の覚悟を探るが、陵雲は自分の大事を蘭麝に知られてしまったことで蘭麝を殺そうとする。その場面を目撃した居士は、そこまで義を立てようとする男と見定め、陵雲を蘭麝と正式に娶わせ、陵雲に割符を渡す。しかし、陵雲は実は割符を奪うため日本から密かに渡っていた六助であった。天元居士の計略は失敗、だまされつづけていた蘭麝は自害する。

六冊目　紀将軍晋伯は大王の夫人（梅夫人）と姫君・王子を預かって古都の慶州に立てこもっている。そこへ武陽侯林官が都から存えて来て、大王の死を知らせ、姫・王子を守り立ててくれとの大王の遺言を告げる。その場に日本からの使い貴田孫兵衛（実は園菊）がきており、日本へ降参するようになだめるが、晋伯は中々聞き入れない。林官が和軍と器量比べをして三韓軍が負けたら、降参すると持ち出す。そこで力比べになり、三韓軍がまけるが、降参をしようとせぬところへ、日本軍が攻めてくる。晋伯が日本軍と合戦しているうちに、梅夫人は林官に横恋慕され、姫・王子に憂き目をさせまいと自害する。最早籠城は叶うまいと判断した晋伯は、姫・王子に印璽と系図の一巻を持たせ明へ逃れるよう妻に託す。晋伯は日本に残した息子（権兵衛）を思い出し、涙に咽びながら、遺言を書き兜に入れたところで、林官に切り付けられ、貴田孫兵衛（園菊）に討ち取られる。

七冊目　慶州を乗っ取った貴田孫兵衛（園菊）は数多の唐人を虜とし、長陣を敷いている。家の者の中には、貴田孫兵衛が実は園菊であることが囁かれている。そこへ、晋伯の妻玉欄女が捕らえられてくる。その折、明の軍師が攻めて来て、貴田孫兵衛に対し、文の無き日本と嘲弄し、額に書かれている詩が読めたら降参すると言いかけるが、貴田孫兵衛（園菊）は彦山権現の霊験で詩が読め、明兵共は逃げ去る。一方、明へ落ちる途中で玉欄女とはぐれた三韓の姫・王子は、山口監物に捕らえられ、雪責めにされる。それを玉欄女が助け、王子が和軍に渡した印璽を取り戻す。実はその印璽は、晋伯の首実験で晋伯の兜にあった一書を通じて、自分が晋伯・玉欄女の孫と知った園菊が、わざと落としたのであった。園菊は、姫・王子を落とすため自ら切腹する。そこへ加藤正清が現われ、三韓の姫・王子を一旦日本へ連れ帰り、必ず三韓を再興させることを約束する。

八冊目　住吉社の鳥居先には三韓征伐の折、削ぎ切って持ち帰った朝鮮人の耳が忘念となってできた大きな石がある。岸沢判官がそこを通りかかった時、三韓の李如松の魂魄が乗り移った小西行長に出会う。李如松の魂魄は岸沢の謀反の胸中を知っており、岸沢の力になると約束する。

九冊目　三韓の李如松の魂が乗りうつった小西行長らは乱行を働くが、割符を手に入れ帰朝していた貴田孫兵衛の働きによって見抜かれてしまう。貴田孫兵衛が蘭麝、園菊、及び母親の菩提を弔う

ため出家し、毛谷村に庵を結び宗春法師と名乗るということを告げると、李如松の魂は飛散る。
加藤正清は約束通り三韓の姫・王子を三韓に帰す。

※底本に従って表記や改行を行った。文字譜は、とくに必要と思われるもの以外に省略した。
底本：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（ニ 10-00156）
https://archive.waseda.jp/archive/image-viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2277%22,%22detail_page_id%22:%221;4948%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

（1オ）
【序詞】瀬川采女さま参るきくより　貴田孫兵衛さま参るそのより　大功艶書合　座元竹本萬作
太白山の蒐南海の昆布。年々歳々諸國より。貢絶せぬ
日の本や。皇統既に百八代。後陽成の院の朝に當つて。三韓盟
に背きければ。皇后征伐の例に習ひ。再び神兵を加へんと平大
領久吉公。肥州名護屋に。出陣ある【ヲロシ】御首途ぞ。華麗なる。
頃は文禄初の年弥生の空もうらゝかに。桃又桃の咲つどふ。桃山御
所の大廣間には大領の満所萩の臺。上段の間に出給へば。御かたへ

（1ウ）
には四職の司岸沢判官信親。己が権威を立烏帽子素襖の袖
もすれくに。兼て不和成加藤主計頭正清。小西対馬守行長。其外
出仕の諸大名其程くに居流れて。寿き祝ふ曲水の御盃も取々に
万々歳と祝しける。萩の臺しとやかに。此度異国征伐は前代足利
累代より。約諾有し新羅百済高麗。我朝の貢怠たれは。万機の政
道預り給ふ我君。其侭に差置ん謂れなしと。五畿七道に触流され。
今宵亥の刻の御陣立。首途を祝する各の参謁。直々お請遊すへ

（2オ）

きに。軍慮の工夫にお暇惜く。自名代に挨拶せよとの御諚なり。取分加藤小西の両将は。先陣沙汰されたれば。嘸かし心閙しからんと。仰に岸沢進み出。其お詞に及ばぬ事。小犬さへ三月飼ば主たる道は忘れぬ習ひ。我君の鉾先を以て切鎮め給ふ此日本。端々の大小名百性町人に至る迄。太平を諷ひ。腹鼓を打て楽しむも皆我君の御恩沢と。阿る詞耳にもかけず。加藤正清御前に向ひ。柴田瀧川亡びて後日本に敵なく。あまつ四海が太平過て。専連哥茶道の世と成。戦場にて首取事より鍛錬せぬ正清などは。今の世の

（2ウ）

廃れ者。朝夕徒然に暮せしに珍らしい三韓攻唐人原が寝言の夢。覚すは加藤が會稽なれど。相役に骨がなふて今少し残念なりと。日頃不和成詞のそれ矢。胸に當つて小西行長。【詞】ヤア聞にくし正清。先陣を蒙るは汝と某。相役に骨なしとは人もなけなる今の一言。某に意根有ば。なぜ尋常に勝負はせで。諸侯満座の此座にて。何故斯は嘲哢なす。返答聞んと詰寄ば。【詞】カクヤ嘲哢でない。生まれて以来此正清。偽りいはぬ諂らはぬ。我君此下と云し昔より御味方に馳加はり。数十年来戦場に。後を見せぬ加藤が軍配。如清と云商人の。腹から出たる対馬守。見

（3オ）

習せんと大領の御賢慮て沙汰された今度の先陣。手本にせよと云まくればヤア いつかなく叶はぬ事。先陣は此行長。猪武者の主計頭某に先陣越られ大鼻明を見物せん。ハヽヽヽ。口先計の商人侍。似合た様にちくらが沖で。舩の張番分相應。此正清が手の下に。三韓国の百万騎。掴みひしぐを見物せよ。見ごと汝が。儕がと。思はず詰寄猛将勇者。【詞】ヤレ詞論無益なりと。萩の臺制し給ひ。【詞】先手の諸将争ふは味方に取て不覚の基。

たとへ不和成中にもせよ。軍をさけて其国の鋭気をくじかぬ例に習ひ。互に水魚の交りが取も直さず味方の鋭気。必意根なき様と。仰にはつと両人は。思はぬ麁忽

（3ウ）

恐れ入。低頭平身なりにける。かゝる折からお次より。小西如清参上と。おとなふ近習が聲に連。白木の箱の角菱も。取た禅門礼服に。大小遉行長が親と定まる座に直る。判官見るより詞をかけ。如清老太義く。シテ我君より沙汰されし。地理の圖持参召れしかと。尋ねに如清謹で。二つの箱を御前に並し。【詞】両先陣へ渡さるゝ。三韓八道の地理の圖。先年より所持致せしを。相違なく書写させ。則持参仕りしと。詞に判官立寄て。【詞】不知案内の異国渡海。軍慮に御心砕かるゝ。我君の御上覧に入奉らん。如清老暫らくと。絵圖を預る岸沢が。底意は深き奥殿へ。箱携へて入にける。萩の臺如清に

（4・5オ）

向ひ。【詞】三韓の地理の圖は。孫呉が秘書にも増りし賜。差上し其功に。何成共望有ば自取次得さすへしと。仰に如清は恐れ入。【詞】是はく冥加に餘り有がたいお詞。お取立に預りし悴行長。大名の御隠居と敬るゝは此身の果報。悦ぶ筈を悦ばぬは生れ付た侍嫌ひ。生得仕馴し薬商ひ。町人程気楽なものはないと存じまするから。此親仁めは商人より外に望はござりませぬと。蓼喰虫も好の道。思ひ入てぞ願ひける。程なく出来る岸沢判官。以前の箱に舩印持添御上意なりとゆるぎ出。【詞】如清か願ひ御聞届有て。武士の付合御赦免有。勝手に薬商賣致されよとの仰なり。まつた地理の

（4～5ウ）

圖は両先陣へ下し置るゝ間。泉州堺の浦より目出たく乗舩致さるべし。此幟こそ目印の相紋なれば混雑なき様。計らふべし。我君大領には明早天當御所より御發駕との厳命なりと。二つの箱に舩じるし両将取て押いたゞき。直に

出陣からたちの其身はやがて枳殻ぞと。祝する如清は木ぐすり屋。氏
なき素性玉の輿むかしは賤の萩の臺。今大領の満所とうやまふ諸侯
岸沢が邪佞をおほふ大廣間おのく一同に退参の。烏帽子の紐も長
廊下春の遅日や。桃山の御所の。さかしぞ【三重】ひさしけれ

（6オ）

二冊目

一籏風に颺れば万卒心を靡かせる。久吉公の御進發馳集つたる勇士の面々。廿六万八千餘騎
和泉の国の舟よそほひ堺の浦ぞ時めきける。そほ降雨もいとひなく加藤が家の子監物
兄弟。数多の雑兵引連て出来り。【詞】ホヲ、船手の者共太義く。主人正清公は。北の手の七度が
濱より出船有筈。家中の者は此濱より。出船の手つがひなり。ぬかりなき様計らふべしと。詞の内より
軍蔵が。【詞】ヲ、兄者人の仰の通り。又は刻限に人込なき様。一艘に一人宛。乗より早く船を出せ。寝
とぼけて周障ぬ様。必油断致すなと。聞て舟頭地に鼻付。【詞】イヤもふ其義は兼ての心得。加藤

（6ウ）

と書たる船印をめどにして。出船は沖に有。元船へ漕付まする手つがひに。ノフ次郎八。それく。アモ微
塵も間違ひはござりませぬ。と爰を大事の船子共。楫取々に請がふ折から。御番替りに旅
宿へと。岸沢判官信親。丹平引連高挑灯。歩み来れば目早き兄弟。舟頭退やり持請
れば。こなたも近寄双方の。家来を除て岸沢判官。丹平諸共聲をひそめ。【詞】兼て心を通じ
たる山口兄弟。加藤の奥方春町に縁有御辺等。今度の出陣こそ幸。三韓へ内通し
正清さへ討れなば。それ云立に小西へ取入。日本勢を亡されよ。某は又諸将の留主を心がけ。
大領親子を仕廻ふて取。三韓日本分取にして栄花を極めん。必ぬかりなき様と。底意明

（7オ）

せば打黙頭。【詞】お気遣ひあられますな。我々兄弟三韓へ裏切し。日本の奴原討取た其上で。唐人
原を手に入る。仕様は様々有事と。身の程知ぬ無分別。手に取ごとく述ければ。【詞】ホ、神妙の心が
け
それに付ても味方にほしきは小西行長。今度異国の先陣を。小西に魁させん為。如清

が上し二枚の地理の圖。密に某内見して。加藤が方へは兼て我拵へ置たる。順道をやり
違へにして。あらぬ絵圖を入かへて正清に渡し置ば。差かゝつての彼が難義。廃忘する
内行長に仕て取す身が工夫。三韓にて言聞せ味方に付て力とせられよ。こつちの
様子は書通でと。しめし合せば差出る丹平。【詞】それに付ても久次公の奢の取沙汰。大領公
（７ウ）
のお傍でさへあの通りお留主の内が思はるゝと。下から言出す阿り口。邪智を廻して判官が。【詞】彼
取沙汰に付つ添つ。名古屋表で云ふらし。大領公のお耳へ入様。方便を以て久次が自滅は
追付。是見よ日月の籏は人知ず先達て奪ひ置ば。時日を移さず大望成就。
万事手ぬかりなき様にナ。合点かと吹込ば。巧に馴し軍蔵が。【詞】それこそ手段我々が
讒言は得手物く。早刻限に程有まじ。手筈は互に飛札の往来。おさらばさらばと
山口兄弟。舟場へ行ば岸沢判官。丹平家来引連て旅宿の方へ歩み行。折から
美々しき供廻り今旅異国先陣の。軍に加藤正清と其名を照す高挑灯。出船
（８オ）
の指揮取繕ひ貴田孫兵衛を御供にて。雑兵数多前後に随ひ。御陣へ赴く其跡より。お
園も今は園菊とかはる渕瀬を案し侘願ふ。揉手も主人の手前。憚りながらも涙聲。【詞】ハイく
先程から申上ます通り。御出船のお供先お呵りも返り見ず。夫へ願ふ異国の供。叶はぬならぬ
と幾度か。呵られうがどふしやうが。お傍に居れば何の其。侭よと思へどけふの今。別れて跡
に只一人。何と残つて居られませう。女でこそ有八重垣流を聞覚へ見覚へた。一味斉が娘の
園菊。唐士へ渡り夫と倶高名手柄が致したい。お主様の御威光で。夫が召連くれますやう
仰付られ下さらば。生々世々の御情有かたふ存じますと妹背わりなく願ふにぞ。是幸ひと
（８ウ）
正清が。思案の内に怒りの孫兵衛。園菊をはつたとねめ付。【詞】ヤア又しても叶はぬ願ひ。日頃から
言聞すを何と聞。士民に育し杣の六助。御懇望下されて貴田孫兵衛宗春と性名を
拝領仕り。御奉公を励む某。和漢に晴有今度の御供。女童が召連られうかたわけ者め

が。イエ〳〵軍場へ女を忌といふ事はござんせぬ。勿躰なくも神功皇后。又は女躰にましませ共。弁才天を軍神とする事も。お前も知てござんせうがなそれじやによつて。またくぬかす慮外者。御出船の妨げそこ立てうせう。イサお越あられよと立んとするを正清制して。先待孫兵衛。【詞】此度の異国攻三韓にて高名させ。汝が規摸となすへけれ共。妻が願ひも黙止かたし。跡に残

（9オ）

て久次公の。守護も一つの忠義とならん。心得たるかと打てかへ日本に残す心底をそれとしらねば手をつかへ。【詞】コハ御主人のお詞共覚へず。諸士の面々出陣の。跡に残らば諸家の思はく世の人口。亡師一味斎が牌前へ向ふべき面なし。彼が願ひは打捨置れ一時も早く御陣所へ。イヤサ孫兵衛取にあらず。そちが力量剱術など。人にしられぬ内ならば。人の謗りも有べきか。力士の集る相撲に勝。謀反人の微塵弾正。討取たる其手柄は世上の人のしる所。永く日本にとゞまつて。子孫を残さば一味斎が泉下の悦び。合点がいたか。アレく御主人様さへあの通り。跡に残るか但し又唐天竺へも二人づれ。一所にやつて下さんせと。離れがたなき時しも

（9ウ）

あれ。七度が濱より使の番兵。加藤が前に手をつかへ。【詞】最早御舟の用意よく。諸士も残らず御揃ひ。急ぎ御越有べしと。申上ればせき立正清。【詞】コリヤく孫兵衛。此濱辺に繋ぎしこそ。某が士卒の乗船。我は君の御座船に随ふて。出船なせば園菊に。とくとなだめ得心させ。出船の用意取急げと。口と心は浦づたひ。跡に見捨て正清は。陣屋の方へ急ぎ行。イテ出船と身繕ひ。立上る孫兵衛が。裾に縋つてまあく〳〵待て下さんせ。【詞】正清様の今のお詞。跡に残つて久次様の。守護せよと有こそ幸。唐のお供はやめにして跡に残つて下さんせ。ヤア未練なり園菊。其方も一味斎が娘ならずや。妹背の縁に引されて。

（10オ）

今度のお供にはつれなば死を恐るゝ孫兵衛と。嘲らるゝは武道の瑕瑾。三韓へおし渡り一番鑓の高名見せん。そちは此士にとゞまつて。久次公へ忠義を頼む。さらばと計かけ出すを。猶もとゞめて。【詞】イエ〳〵とても聞入なきならば。わたしも一つ所に唐へ行てお傍に居たいと。

慕ふも無理か。只さへ遠い唐国の。軍によつて二年三年。生死の程も知ぬ身の愚痴

に迷ふが女子の心。コレ孫兵衛殿慈悲じや。情じやコレ申連てござつて下さんせと。真実誠恋慕ふ。涙に面のいやまして。身に降かゝる計なり。孫兵衛不便と。心を察し。【詞】左程に思はゞ某が。異国の供に召連ん。エ、スリヤ御得心遊ばして。ヲ、同道するは是なりと。差添ぬいて

（10ウ）

黒髪を。ふつつと切ば驚く園菊。【詞】ヤァこりや何故にわたしが髪を。ヲ、切た心は此髪の園菊を異国の供。そんならやつはりわたしが身は。跡に残るが貞女の誠。もし其方を召具しならば色に迷ふ日本人と。毛唐人の物笑ひ。不覚をとらば恥の恥。此黒髪を身に付れば。そちも付添心と思ひ。諦めて帰国を待。イヤくそれでも一所にと。争そふ半出船の時刻七つの鐘。響きわたれば宗春つゝ立。【詞】あれこそ出船しらせ刻限。あの幟こそ主人の船。是より直に出船と。かけ出す孫兵衛コレ待てととゞむる園菊面倒なと。ひはらを一當たぢくく。たぢろく隙に飛乗宗春。ぐつたりやつた舟頭が。恟り目覚てうろたへさはぎ

（11オ）

そりやく出船じやばつたく跡白浪とのせて行。濱辺に漸気の付園菊。傍り見廻しくて。【詞】ヤァくくスリヤ宗春殿は出舟してか。エ、そりや聞へませぬ胴欲とあなたこなたと立廻り。詮方渚をきつと見て。【詞】夫故には石とも成。アノ音楽こそ大領様の。御座の御船の出る知らせ。正清様の印の幟。是幸に追付んそふじや〳〵といふより早く飛乗船の舟子共。折よく櫓拍子エイサッサさつさ逆巻波切て沖の方へぞこがれ行。斯とはしらぬ朝嵐。漕戻したる以前の船。岸にどつさり付る音。苫引のけて孫兵衛が。ぬつと出るより。【詞】ヤァくくこりや

是やつはり堺の浦。何故爰へ戻せしぞ様子ぬかせと。首筋取て引上れば。【詞】ァ、申く私は

（11ウ）

何にも存じませぬ。加藤と書た印の幟。くゝり付たる此一通。委細はそれにと投捨てこそかけり行。合点行じと手に取幟。くゝり付たる一通の上書見れば。【詞】ナニ貴田孫兵衛へ加藤正清。ハテ心得ぬと。一書の封開く間に後の方。窺ふ荒任丹平が。聞共知らず讀文躰。【詞】ナニく申残す密書の事此度異国の出陣に。諸士の吉凶博士の占。貴田孫兵衛宗

春といふ名こそ。三韓へ渡りなは討死の凶事有べしスリヤアノ我名は不吉成とや。ムヽと吐胸の
後より。孫兵衛やらぬと両人が。切付るをくゞり。足下に踏へて。腕捻上。【詞】ムヽ討死の凶事有
べしと御聞有より久吉公。武勇の其方をおしませ給ひ。出船のまねびをさせ。日本にとゞ
（12オ）
めよと仰を請て兼てより。船乗に申付一旦出せし其方が船。もとへ戻すも君の
厳命。有がたく存じ奉り久次公守護の忠勤はげむべしと。讀間にたるむを引ぱつし。
又切付る両人が。腕首しつかと両手に握り。【詞】扨は君の命により。我を残せし主人
の振廻。エヽ残念やと沖の方にらみ付て思はずも。持たる肘を其侭に。大地へどつ
さり打付られ。腰骨さすつて起立両人。【詞】ヤァ力計で智恵なしの貴田孫兵衛。三
韓の物笑ひと出陣をやめさせた恥さらし。味方の不吉討とれと。下知にしたがい大勢が。
宗春やらぬと追取巻。【詞】孫兵衛は嘲り笑ひ。ヲヽ出陣叶はぬ某が。手持不沙汰の
（12ウ）
其所へ。祝ふて肴の荒任丹平。犬の餌食にしてくれんと。きおふてかゝる家来か首
筋。腕ぶし臑骨尻こぶた。早手の風に。浪あれて人次ちらす礫打。刃物もぬかぬ
早業さそく。にくきもにくしと抜かざし。丹平急に打かくる。抜身をくゞつて
帯ぎはつかみ。きり〳〵〳〵とふり廻し。まつ逆様に打付られ。岩うつ浪か荒任は。砕け
散てぞうせたりけり。ヲヽ気味よしく心地よし。よしくお供におくる共。今思ひたつ
一念力。通す誓ひは我祈る。高良の神は武内の神力そへて日本へ。新羅の
夷が降参に高麗国の貢物。今百さいの世々迄も盡せぬ。ほまれを【三重】聞とかや
（13オ）
三冊目
抑洛陽の東に當つて。其名も高き臺の寺。久吉の満所御寄附の跡を其侭に。近
曽より久次公爰に仮居の日数立。けふ八朔の寿きと。夫々の名代に。入来る女中の一群は。加藤
が妻と和らぎし。姿に咲す春町につゞく梅の井。藤浪信夫艶書合と。めいくが箱に心を
封し文内や床しき襠の。盛あらそふ萩の庭秋篠。跡に会釈して。【詞】今日は八朔の御祝義

お目出たふ存じます。夫小西を始いづれも君の御供にて。未名古屋に御在陣は。唐の軍の御評義と。思ふに付ても久次公。聚楽の御所には御入なく。【詞】此高臺寺に御逗留。剰百性

（13ウ）

権兵衛とやらを引入て。藁沓の御稽古とは。深き御賢慮有事や春町様。お前は何と思し召と。尋ねにこなたもしとやかに。何にも存じませぬ事ながら。賤の手業を学び給ふは。御身に辛苦を忘れ給はぬ民を恵みの御仁心。けふ八朔の寿きに取交艶書合のお慰みも。文を忘れぬお心がけ。左様でござります。何か様子は存じませね共。めい〳〵に思ふ子細恋の文に認、めて。持参せいと仰に任す拙ない筆もお笑ひ草。【詞】此藤浪は取分てほんの蚯蚓ののたくり書。彼浦嶋にあらね共。此文箱の蓋明たら。ほんに悔しう存じませう。【詞】ホヽアノ藤浪殿の卑下計。美しい御手跡に源氏狭衣いみを含。お書なされた文ならば。艶書合の秀逸〳〵。

（14オ）

ソレく信夫様のおつしやる通り。日頃から能書の聞へわたしらは及ばぬ事。御機嫌に叶ふか叶はぬは君の御前。刻限に間も有まい。おしらせ有迄暫く休足。左様ならば御一所に。サアくお出と一同に。繕ふ衣紋の色深き。方丈さして歩み行。籠鳥の春を乞野雁の友を忍ひ兼。岸沢判官諸共に又も諫めに北の方。お傍さらずの白菊に。妞数多付添て。御寺の庭に休らひ給ひ。【詞】父君大領久吉様。御出陣有て間もなふ我君の御放埒。此高臺寺にお足をとゞめ。近習譜代に至る迄。お諫め申せばお傍へ叶はず剰。賤の手業に日を送り。紛失の御籏の詮義も。余所に成行閨の内。幾夜添寝の事もなふ夢計成手枕を。推量してたへ兄上と。

（14ウ）

かこち給へは詞を正し。【詞】兄弟の縁は内證。妹ながらも久次公の御臺所。御悔の程察し奉るといふ共。日月の籏紛失といひ静謐ならさる今此時。匹夫下賤の手業を以て。日を送

らるゝは子細で有ん。【詞】三度諫て身退くとは。忠臣のふせう業。三度は愚千度百度。
御聞入の有迄は。命限り根限り。性根をすへて御本心を。承はつてお目にかける。ちつ共気
遣ひあらるゝなと。口と心は表裏。佞人賢者の紛れ者。庭の工みは白菊が。恋しい人に逢たさ
を。胸に包みて手をつかへ。【詞】此程より御臺様を始お歴々のお心遣ひも。皆殿様のお身持
を御異見の思し召。それに引かへ采女様といひ曽呂利様。常住お傍に付添ながら。御諫言は

（15オ）

何所へやら。同じ様に酒事計。悪性仲間は油断がならぬ。噂の有艶書合も根が恋からの
思ひ付。ひよんな事の出来ぬ内。お供してお帰り有が。よからふ様に存じますと。君を思ふも
身を思ふ。恋路は同じ習ひかや。北の方取あへず。【詞】我君の御行跡は。四海の大事民の歎きそ
こを思ふて御諫言。申上ればお呵り請御對面も叶はぬ時宜。けふはおしてお目もじと。思へど又も
御機嫌の。程をいかゞと案じ顔。【詞】何さく御遠慮も事による。御返答の善悪によつて。久吉公の上
聞に達する所存。相なき時は四海はくらやみ。イテ方丈へ推参と。御臺諸共立上る。【詞】ヤレ
待た暫くと。快々堂よりかけ出る曽呂利。【詞】ムゝそなたは我君のお伽役。何故待ととゞめぞ。

（15ウ）

サそこが膝共談合つく。あなた方のお為に成。よい思案借て上ふと存じまして。ムゝよい思案
とは先耳寄。シテ其様子は。さればそこでござります。いつの頃よりかたわひなしの御大将。御酒
宴に長じ給ひ。我等が役目は快々堂。毎日此三がい松の下において。草鞋を作るお稽
古の。師範と尊敬し給ふ百性権兵衛をお頼みあらば。十か一つも御聞入は定の物あら立
有ては猶の事。いかぬと思ふておとゝめ申。よい思案とは爰の事。何とどふでござりますと。智
恵ふるひ出す自慢顔。小萩御前聞分給ひ。それこそ幸人を走らせ。折入て頼んで
見ん。早ふくの仰も待ず。そこはぬからぬ此曽呂利。最早御稽古の時刻なれば。早々是へ御越と。さつ
きに

（16オ）

人をやつたれば。追付是へといふ間もなく。御師範様の御入と。告る聲々廣庭つたひ。腰に鋤鍬百姓の
看板打ていつかのか。傍り見廻し仏頂顔。【詞】ェヽ何の事じや。稽古くとやかましう呼遣ひかうるさゝ

に。畠

の仕業取置て岡崎からいつきせき。来て見れは見馴ぬ顔。久次殿は何所に居らるゝ。早ふ

呼にやらつしやれ。不精なわろては有はいと。人を蝿共諂らはぬ。在所質気のむくつけ育。

【詞】イヤく久次公にも最早お入。火急に人を遣はせしはちとお頼の子細有。先々これへと錦の褥。床几も異風の快々堂。手取足取敬ふ風情。腰は掛ても尻すはらず。【詞】ヤヽ何じやいのく。おらが

在所の庄屋殿に有。如来様の打敷を見る様な蒲團の上へ突すへて。どふしやうと思は

（16ウ）

しやる。筵の上に居付ては尻こそぼふて気味が悪い。御免くと立上るを。先暫らくと判

官押留。【詞】仮初にも主君の師範と仰がるれは。おろそかには成がたし。あれなるは久次公の北の方

小萩御前。某は譜代の近臣岸沢判官信親と申者。お頼み申一通り御聞届下さらば。忝ふ

存ずると。いはれて権兵衛まじめ顔。【詞】ヱヽそんならこな様方は大将のお内義や番頭殿じやの。シテ

わしに頼みたいといはんす訳は。どんなこつちやいふて見やんせ〳〵。ハア其頼みとは外ならず。いか

成事

にや我君様此高臺寺に引籠り。酒宴乱舞の御催ふし。深き賢慮と察すれ共。

爰に一つの當惑は。日月の御籏紛失。草を分ても行方知ず。打捨置ば四海の大事。御

（17オ）

臺諸共宝の有所。御詮義の評定是有様。何卒御吹挙なし下さらば。我々が為四海

の為。偏に頼み奉ると。頭を下る主従が。礼義に誠を顕はせり。【詞】是は術ない。そふ慇懃では

物がいはれぬ。お二人の頼み聞届ました。スリヤ御得心下されて。ハテ得心も燈心もいらぬ。大将で

有ふが殿様で有ふが。師匠のいふ事は聞ねばならぬ。コレ此三階松の下がいつもの稽古場。もふ

ござるに間も有まい。ならべて置て承知さす。其證拠はコレ此通り侍の魂大小がはりの此

鋤鍬。畠を掘ぬ法も有。必気遣ひさしやんなと。請合ふ詞に人々の。胸も落つく其

折から。御入なりとざゝめけば。御臺判官白菊も席を下つて出向へは。孔明費長呉子孫子。

（17ウ）

其妙略の胸に満。久吉公の御嫡男久次公。人の謗りもいとひなく笑はゞ藁の御稽古

と。近習小性が持運ぶ松を。印に設けの褥。瀬川采女が付添て入来る躰を見るよりも。

飛立計白菊が恋しと思ふ人目の関。じつと見かはす目八分。詮方なし地の打盤横槌御

前に直し座を下れば。大将詞を改め給ひ。【詞】是はく御師範にはいつもよりは早い御来駕。

いかゞの事と尋給へば。【詞】ィヤ是にはちつと訳の有事じやが。それよりはこなたには。御内義や番頭

殿のいはしやる事をなせ聞しやれぬ。ィヤ其義においては久次が。思ふ子細の有事なれば。

其返答は先追て。時刻移れば草鞋の稽古。いで〳〵伝授を請申され御指南頼むと

（18オ）

盤の前。いひ藁の束取持給ひ。【詞】武者草鞋の仕立様。初めは是を打とやら。其槌是へ。

はつと采女が差出す。横槌御手に取給へば。【詞】ァ、コレく教へてもく。又お祓様を戴す様に。横槌

を持しやるはい。そふ槌を持て藁が打る物かいの。コレ此槌を右の手に斯持て。左で藁を

廻し打に。とん〳〵とまんべんに打ねば。藁にそつが出来るはいの。體の備へが悪いと。槌はきか

すに手が草臥る。サァく打て見たり。へ、そふいふ事では草鞋は扨置。銭ざしにもなりやせまい。

何ぼ教へても埒明ぬ。不器用なわろでは有と。呵り付ればこらへぬ采女。【詞】ヤァ御師範と

尊敬すれば。付上りたる無礼の雑言。そこ下らぬかときめ付れば。ヤレ麁忽すな瀬川

（18ウ）

采女。【詞】姓は道によつて賢しと。師弟に貴賤の隔はなし。七尺去と有本文。以後を嗜扣へ

て居よ。イヤナニ権兵衛殿。彼が無礼は我にめんじ。了簡有と。和らかに。師を重んずる御詞。

【詞】ハテ在所の事は素人じやもの。無礼も麁相も有うち〳〵。サァく大かいに打たらば。そこでそぐつ

て

又打のじやと。くゝめる様にいふ事も。合点行ねば御不審顔。【詞】此頃指南の其中に。そくるとは今

が

始。いか成事をいふやらんとくと。傳授に預りたし。【詞】ェ、子細らしい物の言様。コレそくると云いの。しぶ

を取事じやはいの。ム、それ渋と云事は。木の実の中に有と聞。わらを打故実の中にも。しふ取

事の有じや迄。アイヤく。おれがいふは柿や栗の渋じやない。ドレく。よふ見やしやれや。コレ此藁

（19オ）

を斯くするをそぐるといひ。此出た屑が則しぶじや。何と合点が行ましたかと一々草

鞋の躾方。御大将も感心有。【詞】実城鼓に三つ地。藁を打にも色々の。故実口傳の有物

よと。四海を握る手の内に。又横槌を鳥と鐘。明て岩間の薄氷とけぬ。思ひの北の

方。【詞】最前よりお詞も下し給はぬ御怒り。重ねて申も恐れながら。殿下の大事と聞に付。

自が心の苦しさとやせんかくや有なんと。信親諸共かはらぬお願ひ。御父大領久吉公。異

国征伐のお留主といひ。四海を預る御身として。有まじき賤の手業。何とぞ御心ひる

がへし。聚楽の御所へ御入有て紛失なしたる御簾の詮義。聞分けてたべ我君様と操くも

（19ウ）

らぬ。貞女の鑑。【詞】ヤア又しても諫言立。詞かへさば手は見せぬぞ。ヲ、たとへお手討蒙る共。

御異見申は御身の為。姜后へうるゑんが命を捨て。君を諫し例も有。ヲ、御得心有

迄は義を太山の重きに置。命は鵝□（毛＋鳥）の軽きにくらぶ。生死の境御返答。何とくと詰

寄両人。久次くはつと面色かはり。【詞】ヤア不敵成今の一言。唐士の賢女に儕をたとへ。我を愚

帝によそへし存外。其舌の根を切下んと。御佩に手をかけ給へば。曽呂利を始白菊采

女。さゝへんことも主人の吃相。見かねて権兵衛中に分入。【詞】マアく待しやませく。

コリヤよつ程根の有女夫喧嘩と見へるはい何ぼよい身代でも。そふ中が悪ふては。此世帯は

（20オ）

持まいく。コレ今の世界は。とかく度過でなければ行ぬぞや。お内義もお内義じやはいの。とゝか物

を失ふた迚。男に扨さす事はない。女の役に見まつめて尋ねたがよいわいの。又番頭殿も
番頭殿じや。失物が有ならば。山伏にでも占ふて貰ふて。旦那殿の耳へ入ぬ様にするがこなたの
役。それにまあ口合は。二人ながら悪いく。爰は一番師匠の挨拶。腹は立ふが了簡して。内へいん
て相談さんせ。ハテ密夫仕たといふではなし。手向ひ仕たといふでもなし。殺す程の事は有まい。短気
は損気じや久次殿。此せりふはおれに下んせ。貰ふたく貰ふたぞと。何をいふやら訳もなく。異見の
こしも大将の。怒りも折る計也。【詞】につくきやつと思へ共。師の詞は黙頭がたし。此場は此侭方丈
にて。
（20ウ）
酒宴の跡は艶書合。取次役は白菊采女。曽呂利は師匠の御案内。心得たるかと仰の下。
御臺信親詞を揃へ。【詞】スリヤどの様にお諌申ても。ホヲ、金言は耳に逆ひ良薬は口に苦し。左
程に我を思ひなば。心底見せんと咲乱れし。萩の二枝を折取給ひ。【詞】いつ見ても。かはらぬ萩
の高臺寺。古枝に咲ると詠たるも同じ心。此二枝に折込し久次か胸中。とくと判談致し
て見よと萩投捨て見向もせずいざと敬ふ師弟の道。権兵衛先に御大将。白菊采
女は恋仲のまいらせ。曽呂利も跡に付艶書合の。方丈へ打連てこそ。入相時。花散謎
の。判じ物萩の二枝を兄弟が。手に取て思案顔。【詞】心得ぬ君の一言。古枝に咲るとよみ
（21オ）
たるは。古今集にて躬恒の哥。秋萩の。古枝に咲る花見れば。もとの心はかはらざりけり。此二枝
を給ひしは。ム、扨は我々兄弟に。とつては思案にあたはぬ謎。マアとつくりと工夫が肝要。兄様ではな
い
信親。後にと立上り。心置露萩の花携へてこそ入給ふ跡に思案の信親が。目先にちらり
落散文は心得ずと。手に取上て見る上書。【詞】采女様まいる菊より。ム、扨は白菊采女が恋の文。よい
物が
手に入た。我を二心と悟りし久次。もふ生ては置れぬはい。兼ての手段そふじやくと。独黙頭懐中

より。用意の呼子取出し噴ば音による鹿ならで。萩のしげみを押分かき分。ぬつと出たる忍び
の曲もの。互にそれと近く立寄。【詞】相圖の笛は御用かな。いかにも。兼ての手筈時刻到来
（21ウ）
シテ云付し一品は。ハァ拙者が覚へし南蛮流の毒薬を以て。練上たる此土器。出かした〳〵。
コレを以て久次を。自滅さする毒の仕上。しらせは相圖の此呼子。忍んで様子を合点か。
早く〳〵とおとがいで。教へる仕方呑込曲者又も臥猪と身を忍ぶ。独笑して信親は。方丈さし
て歩み行。斯とはいざや白菊が曽呂利が手を取走り出。【詞】サァく急に成たわいなァ〳〵。又とある
まい今宵の首尾。書て来た文も何所へやら落した程に。お前を頼む合点かへ。サァく呑込で
居るく。采女も追付爰へ来る筈じやが。かたい事計ぬかしおる故。一通りではいかぬによつて。
おれが一作の狂言。コレ斯くと耳に口。【詞】ムゝそんならァノわたしや後に隠れて居て。ヲゝサおれが一
人
（22オ）
思入をするじや。所でこなたが付声で。生霊の取付た狂言。隠れ所はァノ木影。アレく向ふ火影が
見へる。慥に采女じや早ふ〳〵と。一人呑込押やる内。手燭携へ瀬川采女。それと見るより。
【詞】是は〳〵曽呂利殿是にござるか。何やら密々の御用。是へ参る様にと有し故密に参つたが
シテ。其御用は何事ぞと。立寄采女を突退て。わざと苦しき息遣ひァ。爰ぞと白菊
付聲して。【詞】イヤわしや曽呂利ではこさんせぬぞ。ヤァ其聲は白菊殿。さればいなァ。わたしやお前
に恋こがれ。たつた一度の仮枕。便り音伝ない恨顔合しては。恥しうて。いはれぬ故。【詞】曽呂利
様の體を仮に。こがれて爰へ来たはいなァ。エゝ怖めしい采女様。とろ〳〵〳〵は口拍子。姿をまねる。
（22ウ）
女形。それと心の付采女。なぶつて見んととぼけ顔。【詞】ハテ女子の執着といふ物は恐ろし
い物じやなふ。去ながら此采女に恨とは。ハテしれた事今宵の上首尾。枕かはして下さん
すか。いやか應かの返答次第。エゝつゝともふ曽呂利様。どふせうぞいなゝ。アゝコレくそれではせりふ
違ひ。そこを紛らすどろくと独身ぶりの。狂言仕形。おかしさこらへて。【詞】イヤく其様な隙は

ござらぬ。我君様の御用が有。それに緩りと言捨て。行んとするをとゝむる曽呂利。【詞】イヤ返事を聞ぬ内はやらぬ。〳〵の聲につれ。心得曽呂利が引留るを振切拍子に手にもつた。

手燭ばつたり恋慕の闇。探り出たる白菊が。程よふ采女が手を取嬉しさ。しらぬ

（23オ）

曽呂利が独舞。こなたは逢恋忍恋。【詞】コレ采女様餘りじやはいなァ〳〵。餘りとはそりや何で。何でとはしらくしい。一度添寝の其後は。此高臺寺へ君のお供。わたしは聚楽に引別れ。文の便りもならばこそ逢たい見たいの念力が。【詞】届いてけふの御供は七夕増りと悦んで。来た甲斐もなふすげない仕方。聞へませぬとすかり付泣聲合点と顔に袖

當て見せんと。愁ひの身ぶり。心に黙頭囁く采女が誠らしく。【詞】スリヤ此采女を夫程迄思ふて下さる心から。曽呂利殿に乗移つた生霊じやの。ヲヽ今宵の逢瀬叶はぬならば。未来永劫生々世々。恨をなさいて置ふか。エヽ怖めしいなァ。ホヽヽ。此様な事いふ

（23ウ）

手間で。ちやつとあそこへござんせいな。アイヤ〳〵今は御用の節。後に〳〵と逃行采女。イヤくならぬとくらがりを。扨す白菊一心不乱。汗水流して生霊の。所作に労れし。曽呂利をとらへ。【詞】エヽ何の事じやそいな。采女様は何所へやら行しやんしたはいな。さそんなら采女を取逃したか。アヽしんどやの〳〵。そふとはしらいで。狂言に身を入てゐら草臥に草臥た。よい〳〵此上はおれが置付。首尾して逢すしらせは幸。快々堂の鶯笛。

噴を相圖に合点か。ム其鶯笛とはとんな音色。ヲヽ聞たくば爰に有。ちよつと噴て聞さふと。袂探つて取出す笛。何心なく噴立れば。それと心得萩影より。伺ひ出たる

（24オ）

以前の忍び。【詞】相圖の笛は信親殿な。首尾はいかにと尋る聲。恟り仕ながらすかし見て。【詞】合点の行ぬ今の一言。何者成ぞと咎られ。なむ三宝人違へ観念せよと抜打を。かいくゞつて手にさはる。鋤と鍬とを両人が取より早くめつた打。闇はあやなきさぐり足。なんなく刀打落し取て引敷其内に。心得白菊かゝへ帯さぐり

渡せば合点と。さそくの早縄時計の刻み。【詞】アリヤ艶書合の刻限。急いて御前へ。白菊殿。曲者うせふと。手柄顔引立てこそ行末の。間毎〳〵は燈し火に輝く。廊下は工を盡し額に歌仙の哥合。艶書合と女房達。文箱携へ行違ふ。留木の薫り花くらへ

（24ウ）

いづれ愚ぞ媚かし。互にそれと傍近く。【詞】誰かと思へは梅の井様。今お下りでござりますか。是はく藤浪様。我君にも御機嫌よふ集る艶書を御添削。早ふお出遊ばしませ。そんならお赦し後程と。挨拶取々引別れ。明る襖は方丈の座敷は銀燭立ならべ。中に大将久次公。脇息に打もたれ操返したる文のあや。白菊采女は左右に別れ取次文箱の。数々は大小名の奥方より。願ひの品は倭仮名和らぐ国のしるしかや。大将一々御披見有。いづれ媚く艶書の仮名文能書かなく。去ながら心得ぬは。奥に一つの願ひ書。一致せしは合点行ず。シテ残りし艶書は。ハツ加藤正清殿の奥方春町殿。小西行長様の御内宝秋篠様。ムヽ両人

（25オ）

の文章。それにてとくと讀上い。はつと答へて文箱の紐とく〳〵開き讀文躰。【詞】うはの空成風の便りは。いとゞ頼みがたくて猶深からぬ。浅香の浦の仇浪は。岸沢判官信親。我々に給はらば君の為四海の為。押て申請度願ひ。御聞届の程願ひ上参らせ候かしく。我君へ御披露加藤春町。讀終れば白菊もさら〳〵と押開き。いつしか替り安き涙の色と。聞に付ても行末の心もいとゞ頼みがたきは。岸沢判官信親。我々に給はらば君の為四海の為。押て申請度願ひ。御聞届の程願ひ上参らせ候かしく。我君へ御披露。小西秋篠。ハテ心得ぬ艶書の願ひ。春町秋篠計にあらず。集りし艶書の末は皆信親を所望の

（25ウ）

筆跡。夫〳〵に増りし忠節。ハテ頼もしき艶書合と御悦ひの顔ばせに。扨はと計両人は賢慮を計る折こそ有。俄にお次騒がしく襷鉢巻りゝしげに。信親を真中に長刀かい込春町秋篠。かこい出たる右左。判官驚く気色もなく。【詞】ハテ仰々しい女原。此信

親には何の科。何恨み有て斯の振廻。子細ぬかせと居尺高。ヲ、子細は胸に覚へ有
筈。久吉公異国征伐のお留主を窺ひ。今小勢の折を幸敵へ内通謀反の企。
日月の籏紛失と云彼是詮義の有其方。夫小西加藤殿不和成仲は私事。
聞捨ならぬ四海の大事いかゞせんと思ふ折から。艶書合の御催し。是幸と認めし皆一
（26オ）
統の濡文は。其方が身にかゝる艶書合としらざるか尋常に縄かゝるか。異義に及
ばゝ相圖をしらせ組子を以てからめんや。ナァく何とゝ身構へたり。久次莞爾と笑はせ給ひ。
賢を賢として色にかへよと。皆執心の恋の文。手柄次第に口説落せ。それを肴に
一献酌ん。采女白菊銚子持と。黒白分らぬ大将の。仰にハッと両人が酌は相惚色
好む玉の盃底知ぬ。判官が高笑ひ。【詞】ム、ハ、、いや事おかしき刃向ひ立。久吉公の御
覚目出度判官。謀反抔とは思ひも寄ず。入ざる事に骨折ずと。御酒宴のお流
でも。頂戴するが其身の仕合。刃物ざんまい取置。〳〵。ヤァ覚ないとは卑怯の一言。
（26ウ）
白状をせぬにおいては。長刀にかくるが何と。小しやくな腕立。日本弓馬の棟梁たる
真柴大領。久吉に向ひ尾籠至極。すされやつと呼はるにぞ。【詞】ム、現在臣たる身を以
て久吉公とは心得ず。子細聞んとせき立両人。ホ、ウじたじたせすとよつく聞。年々
歳々寿き同じ。四海太平民安全。武運の長久の吉例と有て御親子の御盃。然る
に此度異国征伐によつて。君は名古屋に御在陣。例のかくるを歎かせ給ひ。信親我
に成かはり八朔寿きの盃。目出とふ納め得させよと。御教書并に御土器。早打を以
て給はる上は。武将宣下の天盃同然。盃の済迄は命を蒙る暫時の久吉。座が高い。下り
（27オ）
おらうとてつへい拉。無念と思へど。刃向はれぬ仮のお主に詮方も。投首仕たる拍

子抜。久次はつと恐れ入。【詞】例年の寿きとして御土器を給はる古例。信親ならぬ父の厳命。いざ先是へと有ければ。塵打拂ひ押柄顔おめず億せぬ信親に。席を譲つて座を下り敬ひ給ふ御有様。人々思はず平伏す。真柴の威勢ぞ類ひなき。やゝ有て久次公。父にも増々御機嫌の趣承知仕り。大悦至極と有ければ。其方迚も堅固の躰満足く。吉例の盃。衣服も改むへき筈なれど。聚楽へ趣も時刻の延引。此侭是にて父子の盃。ハツ頂戴致さん長柄の用意。はつと答へる采女が差圖。妼婢が取々に。

（27ウ）

御代も長柄と持運ぶ。蓬莱山の鶴と亀。信親が懐中より取出す。帛紗包の御土器。三方にのせ恭々しく。押戴て詞を正し。【詞】此土器こそ久吉公の御流れ。規式の盃済ざる内久次に不審の一条。尋ね聞べき子細有。返答有や何と。コハ改つたる御一言。【詞】御不審とはいぶかしし。シテ其一義は。此頃久次聚楽を立去。此高臺寺に引籠り。酒宴遊興に政事の怠り剰。田夫野人の事業に日を送るの条。いか成所存有ての義や。返答聞んと斯の演舌。申開きがござるかな。成程御尤の御尋ね。今戦国の砌四海の為とは云ながら。幾億万の人亡は君一人に帰する恨み。せめて未来を助けなば。心魂滅する

（28オ）

事もやと。此高臺寺に足をとゞめ。七日の勤行勤るも。父を思ふ一つの孝心。ハテ賢くもの給ふ物かな。然らば又。匹夫下賤の手業はいかに。それも軍の心かけ。【詞】手づから沓打草鞋を作るも。戦場の重宝たり。二つには又。父の昔の艱難を忘れぬが此身の冥利。是にも御不審ござるかなとそしん強義も及びなき。云伏られて判官は。それと心に打黙頭。其言訳は聞へたが。武家に戒む不義の掟。ムヽシテ又不義とは何を以て。艶書合が不義の根元。ハヽ左有んと推察せり。其義は此節数多の武士出陣の御供なれば。跡に残りし妻女をあつめ。

艶書合と名付しは諸士の心を計らん為。案に違はす一統に。我に願ひは判官信親。何と。イヤサ

（28ウ）

判官ならぬ父久吉。此義においては御批判の有べき事とは思はれず。艶書合を不義なりと。

名ざすは何者。ヲ、外でもない瀬川采女。妙白菊両人が。取かはしたる艶書の證拠。采女様まいる

菊より。サ是にも言訳ござるかと。差付られて久次公。はつと當惑白菊采女。扨はと春町秋

篠も胸をいたむる計也。判官はゑつぼに入。【詞】何と言訳は有まい〳〵。政道のくらきは爰此納りは

どふ

召ると。尋ねに答へも荒気の大将ずんと立て采女が襟がみ。ぐつと引よせ御聲高く。陰婦

乱妻は国の疵世の妨げ。不義密通の誤りは。儕計か久次に政道くらきと批判請させ。主

に恥辱を与ふる不忠。につくきやつとてう〳〵〳〵。要も抜よと尻の折檻。打るゝ身より打

（29オ）

れざる菊が思ひぞやるせなき。采女は漸頭を上。【詞】心の外とは申ながら。主人の御目を掠めし天

罰。君恩謝するに所なし。此上の御情。せめて最期は武士らしく。切腹仰付られなば。お慈悲

の上の御憐愍。ヲ、まだしもの一言さこそく。シテ白菊が返答は。ナ、何とじや。申上るも恥かしながら。

わたしが方から見初た殿様。御いつか逢瀬と明暮に祈る。結ぶの神ならぬ。未来迄。もと心

の尺。いやと有のを無理やりに。口説落せし玉章が。證拠と成て采女様。我君様のお呵りを。

請る計かお命に。及ぶも此身の徒から。切なりと突なりと御存分遊ばして。采女様のお命

をお助けなされて。下さりませ。秋篠様。春町様。お執成を計にて。あなたこなたを伏拝み涙瀬

（29ウ）

川に身を流す恋の渕瀬ぞいぢらしく。心に不便と御大将。【詞】ヤア不義密通の科は同罪。政道の

くらからざる。父の面晴両人共。我手にかゝり成仏せよと。つゝ立給ふを春町が。先暫らくと押とゞ

め。【詞】御怒りの程恐れ入候へ共。科極りし不義の両人。お手討は其身の仕合せ。おとゞめ申にあら

ね共

寿きの御盃。済ざる内に血をあやすは御身の穢れ不吉の沙汰。目出とふ吉例済し上。餘人
に仰付られても。遅からざる御成敗。女の差出た事ながら。【詞】お呵りも返り見ず。ヶ様に申も二
人が命。サア二人が命は風に燈し火。消ぬる間の暇乞。お願ひ申上ますと。情籠りし此場
の利發。大将面を和らげ給ひ。【詞】政道のくらきと有に。心せいたる今の振廻。疎ならぬ父の盃。
（30オ）
イサ頂戴仕らんと。座を改むれば判官信親実尤。【詞】成敗は跡ての沙汰。大切成久吉公の御流れ。
八朔の吉例目出たふ盃。はつと敬ふ親子の礼義。長柄加へは春町秋篠。心しづかに久次公。土器
取て押戴きたんぶと請て其侭に。既に呑んと仕給ふ所。いつの間にかは百性権兵衛走り寄て御
土器。取より早く打付れば椽に當つてこな微塵。座席も散乱人々も驚き騒ぐ計也。
判官詞をあらゝげて。【詞】ヤア土百性の分として存外成此妨。師範といふ名に久次殿押だまつて
ござつても。大切成御土器打砕いたる傍若無人。縛り首討覚悟せい。ヲヽ大切成御土器
打砕いたる申訳。まつ此通りと傍に有。脇差抜取我と我腹にぐつと突立れは。是はと人々
（30ウ）
恟り廃忘。【詞】ヤア騒がれな方。我切腹は四海の礎。最早遁れぬ判官信親。謀反の一々白
状せよと。痛手ながらに詰寄権兵衛。【詞】ヤアコリヤうぬ血迷ふたな。此信親に謀反有とは
何を以て。ヤア愚々隠しても隠されぬ。久次公の御身持名古屋へ讒言なし。乞請たる
御教書といひ。寿きの御土器に。毒を仕込で我君を。害せんといふそちか工み。慥な
證拠も捕へ置。急いで是への聲に連。はつと答へて件の忍び。引立出て御前に突すへ。
【詞】鶯笛の間違ひに。初音を上て一々白状。最早遁れは有まいが。サアく何とゝ曽呂利が
忠義。コハ叶はじと信親が手裏剣ひらりに倒るゝ忍び。大将目かけ切付るをかいくゞつて
（31オ）
打落し。御教書奪ひ立たる勢ひ。無念歯がみの判官が生死の境障子に血煙。是はとおど

ろき押開く内に苦しむ小萩御前。【詞】ヤア御臺様。何故の御生害。様子いかにと立騒げば。【詞】ア、よる

まい〳〵。女の浅い心から。御異見は皆裏はら。謀反人の兄様に。血筋を引た自故。添れぬと有謎の萩。とけて消行露の身を。【詞】哀れと思し未来の縁。必待ておりますと。言聲迚も。咲きらぬ枝や枯行花嵐散てはかなく成給ふ。春町秋篠白菊も。いたはし涙聲立て只伏沈む計也。大将うるむ御目を拂ひ。【詞】不便の最期を見捨るも眼力違はぬ岸沢が工み。助けがたきやつなれ共。父久吉の寵臣たれは此侭に見遁す間。今日只今

（31ウ）

心を改め。忠義怠る事なかれと。智仁優美の御詞。肝にこたゆる判官信親。ハヽア恐るべし慎むべし。【詞】君の仁心妹が最期に忠義の心金鉄。一つの功を顕しなば。又改めて御目見へ。先それ迄は我と我君を憚る暫しの遠慮。ホヽ左なくては叶はぬ所。大罪人の信親を助る上不義の両人。無益の殺生。采女が大小取上て。白菊諸共目通り叶はぬ。曽呂利彼等を引立いと。いはす語らぬ御情二人の妻が。介抱に。有難涙せきあへず曽呂利がすゝめに是非なくも。君に名残を鴛鴦の。剱羽隠す信親を。遁す大勇遁るゝ不敵見返り。くふり返り善悪二つを一筋にしほくとして出て行。大将跡を見送り給ひ。

（32オ）

我に師弟の約をなし。命を捨て信親が工みを顕はす百性権兵衛。包まず俗性打明よと。仰に苦しき息をつき。ア、思ひ出すも昔の昔。【詞】我父と申は三韓の忠臣。紀将軍晋伯といつし者。一年佞者の舌頭によつて逆鱗を蒙り。此日本へ押渡る。其時我は五才の砌。母は異国に残し置。親子此土に蟄居せしに。父英雄の聞へ有ば。大領大きに懇望有ど。忠臣変ぜぬ父の気質。恩義にせまり某を秀吉公へ御奉公。名も改めて。仙石権兵衛。【詞】忠勤励む其折から。佞人の工み顕はれ父晋伯疑ひ晴。三韓王より迎ひの乗船。我も従ひ行んにも。二君に仕へぬ親子が義心。唐と日本へ一世の別れ。【詞】それより我も

（32ウ）

義は鉄石。爰の合戦。彼所の戦ひ皆。久吉公の御手に属し。忠義の臣と御褒美有て。【詞】お家に傳はるゝ千鳥の香炉。拝領なしたる我君の。威勢は増々盛んにして。切従へし六十餘州。【詞】まだ〳〵不足の御顔色。正に異国を従へん。御賢慮有と察せしより情なや。三韓王は父の御主人。親子剱を合すは必定。忠と考とに踏迷ひ身退いたる其砌。妻が臨月足手纏ひ。【詞】伊勢海道の松陰に。則千鳥の香炉を添。捨たる娘は何国共知ず過たる此年月。案に違はぬ異国の征伐。【詞】扨はと思ふ其日より。久次公の御放埒。合点行ずと今日迄御傍に付添しは。影ながらの御奉公御本心を承り。打割たる土器は。毒とはいへど寿きの

（33オ）

妨といひ三韓の御供にはづれし申訳。帰朝の後は父君へ。御詫願ひ奉ると。始て明す権兵衛が。素性は唐と日本に類ひ稀成忠臣也。久次始終御聞有。扨は父の噂に聞し仙石にて有しよな。【詞】只者ならずと今日迄。賤の手業に師弟の約束。左程忠義に命を捨。見顕はしたる信親を助け置しは御籏の盗賊。今あら立ては宝の破却。心赦させ取得ん方便。迷ひを晴て成仏せとと。名智の詞に二人の妻。扨も揃ふた名将勇士。是に付ても夫の片意地。唐の軍に高名の。又争ひが出来ふと。案じらるゝは加藤殿。さればいなア。小西殿も同し事。日頃の不仲にひよつと又同士討には成まいかと。思ふた計春町様。秋篠様。何と生死は唐士

（33ウ）

の夫を思ふ。貞節義士今際の手負は莞爾と笑ひ。今ぞ迷ひの雲晴て西方弥陀の御国へ行ん。されば哥にも極楽は。はるけき道と聞しかど。勤ていたる所なりけり。南無阿弥陀仏〳〵。と引廻す。刀片手に御大将。我も聚楽へ帰館の供。曽呂利参れの聲の下。俄に聞ゆる鐘太鼓修羅の相圖を引かへて禅の勤に。轡の音りん〳〵。しと〳〵。そろ〳〵曽呂利。引出す駒に。御大将。ひらりと。法の道すぐに。其名をてらす天が下手に握たる傘の珍重珍物。名大将。父父たれば高臺寺の古跡は今に。【三重】かくれなき

四冊目

（34オ）

黄沙百戦金甲を穿。楼蘭を破らずんば終に還らぬ日本勢。不日に寄る早使引も

切ざる注進なり。三韓の王城より百里を隔つ河陽関。関門かたく戸ざせしは。空飛鳥も羽

をちゞめ水も洩さぬ要害也。高櫓には股肱の輩。右原左原を引連。金海道も諸共に床

机にかゝる其折から。東の方に馬煙り一陣の殺風物凄く。数百万のおめく聲鯨波にさそはれて。

手に取ごとく聞へけり。只事ならすと見る所へ。付従の歩立息を切て馳帰り。【詞】ヤア御油断の所でな

し。

和兵の軍卒雲霞のごとく。三韓の王城へ一番乗の功の者。小西對馬守行長と名乗一二の

砦を一揉にもみ破り。手に立者を人礫。関所へ切入候間。加勢を半途へ出されよと。云も切ぬ

（34ウ）

数多の雑兵。命有てとばら〳〵〳〵。惣崩れして逃来れば。億病足に歩立も関門さして

かけ入たる。金海道せき立て左こそと思ひし小西が手勢。引包んで討取れよ。何をいふ間も

事急なり。早おり給へ防がれよと。右原左原諸共に櫓をおりて下知の内。八朔梅の魁に。東風

吹かへす小西行長。鎧づきして花々しく。乗たる馬は青海葦毛。群がる長兵短兵を物の

数共思ふにこそ。前後の多勢一度にかゝるを常山の。蛇勢にひとしき進退堅固。傍りを

拂つて切まくられ。皆我一に逃込〳〵関門戸ざして櫓より。雨やあられと射る矢先。中にて切

折馬上の剱綾取なんどを拂ふがごとく目覚しくも又【三重】危ふけれ。主はしのげと乗馬は射すく

（35オ）

められて立かぬれば。透さず飛おり大音上。【詞】ヤア穴這入する日本の狸におとる毛唐人。此関

計堅めても槐州の抜道へ案内知たる我手勢。残らず廻し時の間に。挟せむれば厨の豕。

鶏料理に寝言の夢。覚してくれんと。飽迄雑言こらへず門の戸踏開き。右原左原が歩武

者を先に立て切て出。廣言吐たるあごた骨。切さげやつと下知につれ。八方より取囲む諸刃の

劔を事共せすせつなが中に死人の山。原龍左右より踏込く命惜まず働け共。元より尖き切
先に気おくれしたる右原龍。はすにすつぱと餘る太刀。こなたの原龍左げさ馬蹄の
塵とぞ成たりける。今は差詰金海道八寸に餘りし栗毛にまたがり。鉄鏈夾を引さげ出ヤアく
（35ウ）
行長。【詞】儕が力を頼とし。金海道此関に有と知ざる奴僕の族。我夾棒を請て見よと。真一
文字にかけ立れば。莞爾と笑ふて對馬守。向ふてかゝるを身をかはし。太腹蹴上て後へ廻り。尾
筒掴んでコリヤ〳〵。馬はしさつて高いなゝき。乗人は捻つて打立るを。右と左によけながら。はぢかれ
まじと
横さまより。引おろす手を障泥に刎。はね倒さんず手綱の捌き。前足すくめて立上る。
馬の三途へつゝと入。四足両手に引掴みうんと一さし金剛力。馬人くるめ差上られ。平首だかへ
鞍坪にかぶり付たるとこぼへ頬。暫しためたる其内に。主討せしと歩卒共。取巻間ゆりまは
され。まつ逆様に落るを見捨ソリヤ請取と馬礫。どつと一度に人なだれ蜘の子ちらすに異ならず。
（36オ）
透さず金海むつくと起。鉄鏈引さけ打かゝる。身をかはしてしつかと取。【詞】儕が腰に覚へよと。
かい沈んでもんどり打せ。鉄棒ばい取無二無三。打すへられて金海道五躰砕けて死てげり。間もあら
せす後陣の大勢かけ付〳〵。【詞】三度の勝鬨金海道が乗馬を。直様奪取小西は笑坪。持せし
立札関門に押立させて。ハツくハ、、、気味よしく心地よし。爰も念なふ正清に乗勝たれば。抜道へ廻
せし家の子郎等。先にて出合手筈せん。此行先は揚州の酒泉縣勢ひぬかさず乗取ん。
者共来れと人数をまとめ。気も関の戸を開き捨。後れし物と急ぎ行。尾花吹音にたゞへ
て鯨波。それかあらぬか物凄や。実武士は物事に。用捨蔦気の主計頭。好む鎧は大蔦目
（36ウ）
黒漆の太刀佩そらし。巖石黒の馬の背も撓む計に鉄鞭横だへ。身近き軍兵相
従へ関取に馳付。【詞】櫓をきつと見上れ共。誰と咎る人もなく。やゝしづまつて音もなし。【詞】ヤ、

心得す。門を開いて守り人もなきに似たる此関所。誤つて込入なば不覚やあらん。手の者共一両輩点検せよ。承ると雑兵共開きし門よりつゝと入。そこよかしこと馳廻り櫓の隅々番所のくまゞ〳〵。尋ね扨してかけ戻り。【詞】唐人は愚の沙汰。麝香ねずの子一疋も有合さずと云上れば。ハテ心得ぬ。河陽関には金海道といへる軍将きびしく守るとちまたの風説。かけ付見れば関塞をおひやかせし跡の祭り。故こそあらんと眼をくばる。塀際の高札に。小西

（37オ）

先陣とよみも終らずなむ三宝。又候薬商人めに此関所迄のられしか。早王城へは百里の行程爰こそ加藤が運定め。後れな者共。つゝけとこそけんたつは王の蔦たるいきほひ揉に。もふでぞ。【三重】追て行。日も早西に落方の。月を吐出すけつふ山。雲を呑込朽木が原。嶽たる巌石つゞら折。並木も和国に事かはる。六丁一里はり取道。正清駒を乗とゞめ。今ひゞきしは遠寺の三更。関所を放れ四十里餘りは馳たんなれ。遥に聞ゆる水音は必定大河有と覚ゆる。遠見くと下知より早く。畏つたと道端の。蘓盧のみきへ足軽大将。身軽につたひかけ上り。行先見渡す玉兎の影。彼逆立て傍りなく。【詞】凡川幅八丁餘り瀬枕打て

（37ウ）

無双の早川。所々に深渕多しと見へ渦音高しと梢より。印下れは聞取正清。絵圖取出して月に照し。【詞】ハテ心得ぬ此絵圖に川有所見へ渡らず。殊に東萊の府を馳出すより。昼夜を分さず急ぎしに。跡に成たる小西めに追ぬかれ。後れを取しは心得ず。【詞】ムヽスリヤ此絵圖は拵へ物。誠の分野近道迄書記せしを我子に与へ。身共に進退混雑させる。如清か術て有たるかと。馬上に絵圖を引さき捨。此道筋も行長か跡を守るか奇怪やと。行先白眼んで立たる所へ。秋の田長の落し水。夜と共見廻る百性共。鋤鍬てん手に三人連。加藤見るより屈竟一コリヤく農夫物問んと。呼とゞめても餘所事に知ず顔して行過るを。こらへぬ加藤か軍兵共。

（38オ）

【詞】コリヤくく大将の詞を聞ざるやと。倍にからつてせちがはれ。【詞】ゑれきてんふらどんからすの。ぽんくと

狼狽眼。歯の根も合ずふるひ居る。正清聲かけさなせそく。【詞】日本詞の。通せぬ土民。

所の者と見へたれば不骨の咎は無益の至り。王城の道案内行先さへざるアノ大河。渡り越

べき浅瀬はなきか。筆談に書て見せ委しく尋ねと聞もあへず。筆者の誰々はつと計。直

に大地へ件の有増。書顕はせときよろりくはん。書て見せよと仕形さへ。一向通ぜぬあぼす

とろんのぽんくと不足なき。年の目つまる五十銭。てうせん気質としられけり。扨こそ無筆

の才六めら。面倒な隙費。ソレ追放せと鉄鞭打ふり。心せき立怒りの筋骨。あれにあれ

（38ウ）

たる気色を見て。恐れわなゝき鬼しやぐはん。しやぐはんくと逃て行。正清馬より飛でおり。

【詞】ナエ、口惜や小西めに一番乗を仕負るかと歯ぎりをかんで立たる向ふに。落たる紙は怪し

やと。家来に取せ星影にすかし見て。【詞】ハテいぶかしや。是も三韓地理八道。今行先の大河迄。

あり〳〵記せし此絵圖。ム、扨こそ行長が落せしな。エ、忝い是さへ有ばたとへ行長速疾鬼が

術有共。我韋駄天の神通にて王城へ一番乗。李鈆が首を掌に握らん事方寸

にたゝへたり。いさめや急げと勇将の。右手に地理の圖しるべにて。多勢と倶に閑道へ息

継あへ【三重】かけり行。頃は葉月の末つかた。加藤主計頭正清。王城へ押かゝり切随へて立日数。霧

（39オ）

立登り一天に。色めく籏もへんほんと。守りきびしき城攻めに。柝の音さへ渡り風も。大手の物

凄き。されば小西對馬守三韓の分野を失ひ。道路に迷ひ瀬と。士卒を残し只一騎。城外間

近くかけ付て。馬乗廻し見渡す星影。【詞】ム、噂に違はぬ先陣札。エ、残念く。頼み切たる絵圖を

失ひ。最早終の里数と成て。加藤めに魁られし先陣札。後れを取し残念やと。無念の拳握

詰血汐に手綱を染けるが。胸を定めて馬乗放し叢へどつかと座し。小西對馬守行長が。骸

は爰にさらす共。望かけたる城中へ所存を立ん最期の一念。是迄なりと腰刀。抜放したる後の方。

【詞】ハヽヽヽ。ハヽヽヽ。城外響く高笑ひ。何所と小西が振仰向。櫓の上に加藤正清。挑灯引さげ我一人
（39ウ）
武者ぶり。尖き其骨柄。【詞】ヤア生前に合す面なし。恥を知たる行長が。腸汝に打付んと云せ
も立すハヽヽ。誉れも恥辱も其度々に。生死を極めなは。嘸かけがへの命も有ん。場合を
知ぬ狼狽武士。ヤア生死の場合を知ばこそ。覚悟極る某を。身の程知ぬと嘲る何たは
言。ホヽヲ前に気を張後を知ざる狼狽者とは其事〳〵。御辺と我を両先陣とは。久吉公へ判
官が。勧め込だる巧の下知。まつ此ことく此土にて一番乗を争はせ。同士討させん謀と。白眼だは
ひが目で有まい。目先に計気を張て。御膝元の一大事に。心付ぬ卒爾の生害。生はかたく死は
安し。小西程の兵が切た腹は縫れぬ道理。とくと勘弁せられよと上べは尖き正清は。鉄味も
（40オ）
よき男也。理に伏られて小西行長。非の一詰にほつくと折。【詞】伏見の御殿で争はれし。知命を経た
る
30
遉の老巧。血気の小西が及ばぬ確論。ハヽア誤つたり〳〵。貴殿の一言聞ずんは。徒に命を落さん。
我一身の恥辱は小事君の大事にかへられず。是より直様帰朝して。王城の一番乗。貴殿に後
れし不覚を慙。迯帰りしと言ふらし。彼判官が陰謀を。探り知んはいと安し。【詞】ヲヽ遖く。愚見の一
句
に左程迄。賢き心の小西行長。帰朝と有ば我も安心。サヽヽちつ共気遣ひ御無用とほどけ合
ては底意なき。むしくる空の大白雨降てすゝしき。義臣と義臣加藤遥に弓手を見やり。
【詞】アレく西の方水原郡より。東に當つて寄来る放火。山野にみちて見へたるは只事ならすと怪しむ
（40ウ）
うち。響き渡れる貝鐘太鼓城中あはやとひしめく内遠見の速者早手の兵太。自へ鑓
あへず馳来り。【詞】扨も王城日本勢に切取れ。大王李鉛も亡し由。大明へ相聞へ【詞】援兵四十
万襲ひ来る先鋒の大将。雲霞のごとく此城を取囲むべき結構なり。御油断有なと
言捨て又引返しかけり行。扨こそ用意と下り行正清。行長暫しと押留め。【詞】ァ、急がれそ主計頭

帰朝と定むる對馬守が置土産。あれに扣へし手の者引連。大明の先手の奴原。一當あたつて見せ付んホヽヲヽ潔しく。其餞別は正清が此頃誅せし三韓王。李鉛が首と櫓より。手玉に打を宙にて掴み。ハヽ慥に受納仕ると直様抜たる太刀先へ。是門出の血祭よし。よしあし

（41オ）

茂る判官が。逆意の実否はぬからぬ〳〵。【詞】絵圖に合せし我抜道。酒泉縣の切所より。大同江へかゝる

迄。難所なけれど敵の要害。ホヽヽ覚へ有。りんかいちくしう連山の。湊へ出れば舟路の通路。よくぞ知たりそれよ〳〵。南徉東莱山越に。釜山浦迄は一筋道合点か。合点と勇猛将心一致に唐倭引別れれそ【三重】急ぎ行

五冊目

照陽江から。朝七道伽耶山陰。すくれば咸鏡忠清道。まだ會寧府全羅神雲縣ちやぐほいきよ。唱哥も他の国所。神雲縣ぞいまめかし。往昔箕子を封じたる三韓の分内にて爰に中帯の玉泉を移す。木魚の禅勤。関帝堂の賑はしき紅のいらかぞ異様

（41ウ）

なる。参りも時の流行もの関帝帰依の参詣人。御籤取々寄たかり。【詞】ナント貴様の御籤はどふじや。イヤ悪ふはなけれど後に吉とは廻り遠い。ヲヽ其遠い青楼からおやまげいこが引かけく参るといふも。利

生の有に極つた。アレく向ふへ見事な色魁。ヤアンリウくチと出かけたか。内の婦人がきめてはならぬ。そりやこちこらも帰

去来〳〵。けんくはんたさつにこり果たと。打連立て下向する。桃園も早実を結ぶゑにしを販く

章甫より。傾城と書。文字は違はぬ色香迄。蘭麝と廓に指折の。唐の曲輪の全盛と。

禿仲居を引連てさつきつゝしや。花かつみ。かつ見る夏の餘所道姿。ヲヽイくと章頭の理外。

直綿巾も汗たらく。【詞】ァ、コレ申太夫様。日本の八文字とは事かはり。裾もとくれぬ道中のはかいきで。扨走つ

（42オ）

ても追付れぬ。章甫の廓から爰迄高で二里にたらぬ道。見はづしては成まいと拳相撲

の行司役請取た程気扱ひと。息もすた〳〵蘭麝は打笑。廓を出るは道な事。何の其

様にせくものでいな。道草摘せてくらべたり傍輩衆の癖云たり。ねり物の様に歩行ているに。

走つても追付れぬとはヲ、仰山。いしこそふにと媚めかし。仲居が傍からたくしかけ。【詞】仕合な理外

様

口の達者な其かはり。二本の足が摺小木に成程急がしやんしたやら。爰な門のアノ瓦が□（革+可）れ

る

様な赤い顔と。なぐさまれてもへらぬ顔。【詞】生れ付て皮薄な茄子の性が顕はれる。ヤ茄子のついでに

太夫様のはでな噂高いぞへ〳〵。たかいとは何がいなあ。ハテ雲つく様な大男の八百屋の噂が

（42ウ）

ゑらふ高ふござります。廓中で一二を争そふお前なりや。もそつときやしやなやつしで

もあらふに。あらこましい八百屋風情に御心を移さるゝは。アイわたしが好じや。構ふておくれな理

外様。イヤ構ふのじやなれ共お客方が聞てなら。らんじや騒ぎとこち付を粋と思ふがすまた

なり。爰に章甫のぶい〳〵客。天敬雲寛。連刀察迚我侭なかぶり。物からめい〳〵が気性

顕はすはで衣装いかつがましく歩み来る。【詞】是は粋様方お揃いの御来臨。幸けふ五明

楼の太夫様も御一所によい所での會合もあなた方の日頃の念願。月下老そこのけの関帝

様のお引合せ。爰でこそ兼ての立引存分に遊ばせ〳〵。ヲ、サく廓で人に指折れる此方ども。

（43オ）

帯劔の手前も恥ず。アノ蘭麝に打込て口説共三人共に振付られ。日本の求塚より

上を行て一人へなびいて貰ひたい。合方定めは此堂の御籤。合た者が則身請何といや

おふ有まいが。ァ、雲寛様そりや御念が入過る。お金の自由なあなた方。太夫様じやてゝ何

のイヤでござりませふ。ァ、コレ理外様何が自由に成にもせよ。いやなお客は振て〳〵振つけるが

勤の意気地。そんな返事はいやいなと。ずつかりいへ雲寛か。扇でひつしやり章頭が天窓。あいたし

是はと口ごもる。【詞】ェ、又しては馬鹿をつくし太夫の機嫌を悪ふする左平人取置〳〵。イヤナニ天慶。

此堂の居士は我々が軍学の先生。密に披露の事有とはめい〳〵が器量を見立定て

（43ウ）

印可の傳授ならん。案内せぬうち武藝の守り。関帝馬に祈念せん。いざと一同に打連

て。堂に登れば内陣より。それと立出る蒼珍来。【詞】ホウコリヤ丁令府のお弟子方お早い御

来駕。老居士には只今熟睡。暫くお扣へ遊はせと。挨拶すれば。【詞】ナニ先生にはお休とな。

然らば暫く相待間我々が運定め御籤を頼むと天慶が。年どをいへは蒼珍来。祈

念の内に女同士。【詞】太夫様御らうじませ。扇風の宅女さまの瑠璃提が上つて有。アノナァまだとら

久のちくさまの提籠も。ヲ、ソ、く千里様のもあそこに見へる。提籠や絵馬は有筈。アノ大きな鋒

とやらは。コレ天慶様何の願でござんすへ。ハテアリヤ関帝の持つしやる青龍の偃月刀。八士一斤の重い

（44オ）

物木で拵へて軽ふ上たは。力のほしい願と見へた。ェ、あれが奉納物でなくば。祭りの俄に借たいと。

理外が仇口振廻す。御籤の箱より蒼珍が。【詞】第九十五籤と讀上るを。小僧が取て差

出せば天慶は戴いて開き見て。【詞】マァ小口が中平じや。ム、一般器用与人同。此文は中ぐらい肝心の

婚が

定まらずとはコリヤ奇妙。トリヤく此方もと連刀察。年をいふ間に籤振出し。第廿六籤。同しく

書付開き見て。【詞】ハァ中吉とは面白い。富貴は是天よりなす所にして人力の及ぶ所にあらず。知た事

の

時に拙が色事はいまだならず。ェ、いまくしいといふ内も。心の願に気のせく太夫。【詞】マァわたしを早ふごろじやつてと。聞て振出す御籤の竹。【詞】第七十三籤。渡せば頂き。ム、ウこりやまあ

（44ウ）

何といふ事じや。雲関様見ておくれ。ドレくム、王照君懐漢帝。癡心指望成連理。たとへばしいて事をなす共ついに我心のごとくならず。到底誰知事不諧。ホイハツと気がゝりぐど〳〵と。胸ふさがりし其風情。【詞】ハテ合もふしぎ合ぬもふしぎ。残りの御籤は出直して跡の事。ソレく

先生へも見廻たし。先客殿で普茶を賞翫。ヲットそれならいづれも様。理外が先陣仕らふ。

サァくお出と打連て客殿さして入にけり。跡に蒼珍つゝくりと。【詞】ェ、漸お勤仕廻たりや又普茶の拵へじや。いつも八百屋の陵雲が来る時分。何として居る事と。見やる日影もかぐろへ事。

あぢか荷ふて陵雲が唐の八百屋も横鉢巻。かふり物さへ綿巾ぐゝり。青物御用ござり

（45オ）

ませぬかと音づるゝ。【詞】ヤァ待兼た八百屋の陵雲。普茶のお客も参つてじやにけふはどふして遅かつた。ハテ仰山な高のしれた精進料理。遅ふ成たも彼お前の内證の誂へ物。八方や塗箸を拵へて居る間。何じや八方やぬりばしとは何所におれがそんな物ェ、学文に疎い人。コレ此事じやと荷籠の下。【詞】ェ、蛸や鰻を持て来たか。ヲットよし〳〵。寝酒のあてじや味い〳〵。ヲ、其替りおれが頼む事が有。何じや愚僧に頼むとは。いかなる事と云内に。小僧が走つて。

【詞】蒼珍様〳〵老居士様が呼しやると。いふにあたふた蛸鰻袖へくすねる生ぐさ坊主。諸事は後程板元で。早ふ〳〵に蒼珍は。小僧に連て急き行。【詞】ェ、味ふ仕かけて抱込ふと思ふ間に

（45ウ）

逃してのけた。ヤ幸けふは関帝様の御縁日。此間から心願の百度参りを今の内に。そふじや〳〵と宝前の。数取もつて用意の半。蘭麝は奥の座席をば。酔にかこつけ。遁れ来て。傍に寄添しこなしに。訳有中としられたり。陵雲ふいとすりのいて。【詞】ェ、誰じやと思へは蘭麝殿ェ、コレお百度参りの邪魔に成。誰でもござれのじな付は見苦しい。定てお客も奥にじや有。穢れた形

で傍へ寄て貰ふまい奥へいたく。ェ、つんともふわしやお前に問ねばならぬ事が有ど。其様に歩行て計居やしやんしては。コレナく。ェ、あたどんな。よし〳〵いつそわしもお百度参りするはへ。ハテ勝手に仕た

がよいわいの。アイ勝手にせいでかいなあとすねて見せるも恋の癖。【詞】ェ、もそつとしつかに参り

（46オ）

いなァ。サア用があらばいふたく。アノナ王照君とは何の事じやへ。何じや王照君。ヲ、そりや昔

の女子の事。サア其王照君懐漢帝。癡心指望成連理。到底誰知事不諧。コリやマアとふ云

心じやへ。ハテ小むつかしい。唐に育てど八百屋商売。そんな隅切角な事知ふ様はなけれ共。咄しに

聞た王照君胡国とやらへ渡され。帝様を恨んた事が有げな。サア王照君とやらも帝様を。

折角思ふて居たで有ふに。胡国とやらへ捨られた心の内。末頼ない色事と思ふでござんしよ

なァ。ハテかはつた事をいふ人さん。昔の王の色事と當世こちとが気の圖は段違。そつちの魂さへ

返らねばとつこ迄も付て行。サア付て行のでほつとりと草臥たわいな。マアちつと休もふかいな。ヲツト

（46ウ）

幸此荷籠。渡す楞子に腰かけ合。【詞】定めてけふの客といふは噂に聞た浪人の三人組。きやつ

らが師範と頼んだる此関帝の天元居士は。我為にも軍学のお師匠。折を得て軍術の奥

義を請度望有故。元百性の我なれど蔚山の古郷捨て去年から此地に徘徊。縁でかな

そなたと馴染。長らく足を留ふと思ふも。師の譲りを懇望して。稽古に執心のきやつらを乗

超。奥義を何とぞ極めんと心のせまる此時節と。底意咄せば黙頭蘭麝。【詞】サアお前の励みは

尤なれど。わたしも知た天元様。こはいお方に武芸の稽古。もふよしに仕たがよい。そしてまあアノ三

人は武

士の浪人。平生の様子を聞に並大躰ではあの衆を。乗越られはせまいぞへ。ハテ一丈二丈の高塀

（47オ）

さへ乗越ふと思ふ物。あいらぐらいを超兼ふか。ヲ、片意路。商人たてらそんな事。イヤく一旦思ひ立た
奥義傳へて武士に成。イエくそりや叶ふまいぞへと気に張付ると知らぬむつと気。【詞】そふ聞は猶の
事。あいらに勝て武士に成て見せん。サアそれが悪ふござんすはいな。エ、こいつか〳〵〳〵へりくくと
やか
ましい。だまらいでなと打かゝるを。蘭麝がはずせば打かへる。椚子ひらりと飛かはし。宙に握
て。【詞】へ、そんなじやいかぬ。ホ、ヲ、油断のない。そこへわたしが此笄。はつしと打を打ずに上
る。それ見て
置ておくれやと。渡して置て走り行。【詞】エ、拍子のないと。笄に。結ひし書付紅粉筆て。【詞】書た
は何
じや。晩に行そへ。エ、何の事じやと打笑ひ勝手へこそへ入にけり。燕居の一間押開けば。竹
（47ウ）
騎にかゝる主の居士。おどろの髪髭三千丈。鴻盧の雪と降積る。身の蟄懐を披露
せんと。兼ての案内に入来る。腹心の門弟連刀察。天慶雲関一同に。打連座席に押
直れば。【詞】是はいづれもよくぞ入来。是へ〳〵と挨拶有ば各一同に拝謝して。【詞】今日我々へ何か
密談
の旨有と。紙札を以ての御しらせ故申合て参つたか。シテ御披露の趣は。ヤレ音高し申入度
其子細は。今日本の軍勢我国へ乱入して。早王城をも攻取和兵。追退けん我企。それに付
ても希代の事は。日頃帰依し奉る関帝菩薩。此程つゝきてふしきの霊夢。汝か義心感
ずる餘り。我此士に再来して。門弟の中に身を現し。影身に付添居る間。其印を見ん
（48オ）
と思はゞ此山影の肉桂の林。うづ高き地を穿見よ。必印有べしと三日迄同じ霊夢。心の
迷ひか正夢か愚老が心一決せず。各いかにと尋れば。連刀察感入。【詞】それこそ霊夢に疑
なし。古への関羽の化身先生の影身に添とは。ハテ何者で有ふなと。口にいはねど心には。めい〳〵

おれじやと髭を撫我慢の鼻も。高咄し。こなたに陵雲聞共しらず天慶は倍取て。

【詞】何よりは先先生の夢を目當。肉桂の林を尋事をためすが近道と。三人評義の其中へ。先暫くと陵雲かけ出。師匠の前に手をつかへ。【詞】去年の冬から御指南蒙る新参の私なれば。御大切な評義の席。出る事ならぬ羨しさ。恐れをも返り見ず立聞したる一部始終。何とぞお慈

（48ウ）

悲と思召。人数にお加へ下さらば。倶々忠勤盡したしお聞届け下されよと。餘義なく願へど老居士は有無の返答並居る三人。大口明て高笑ひ。【詞】ハヽ、何じや匹夫の分際で。此人数に加はらふとは。及はぬ事叶はぬ事じや。ヲヽ雲関がいふ通り。大事の密事を立聞するひがみ根生。軍学武藝は思ひも寄ず。すつ込おらふ。サアサヽそこがぞつこん執心故。ハテならぬといふにどびつこい。相人に成も隙費へと。立を暫しととゞむる陵雲。居士は尖き聲あらゝげ。【詞】ヤア錐を袋に入

置ば其先外へ突つらぬく。たとへは汝匹夫にもせよ。袋をつらぬく錐のごとく。器量常

に見るならば。一人よりは十人味方のほしきけふの會合。呼出さで置べきか。はぶかれしは平生に心

（49オ）

かけわるさと。身の程しらぬうづ虫め。見るも中く穢らはしい立てうせう。ヤア御尤ではござれ共。ヤア詞返す慮外者め。是非遮て願ふならば。師弟の縁を是切と尖き怒りに是非なくも。しほ〳〵として立て入。居士はせき立ヤレいづれも。匹夫にかゝりよしなき隙取。早く彼地を吟味有。我も其中関帝へ猶も丹誠ぬきんでん。早く〳〵といら立の。居士が勧めにきをひ立。鋤鍬てんでに岨つたひ。山路入行を見送つて立切。障子こなたより。心に不審立出る陵雲。傍り見廻し独言。今師匠の夢咄しも。関帝の霊夢と云是が啌。又弟子の内に化身の者有と云。是も啌じや肉桂の林に一物埋置たるも。門弟の器量をためし。印可を

（49ウ）

譲る奥義ぞと見極た此陵雲。常々師匠の詞にも。稽古を励め見所有との仰。それ
に引かへけふの一言。但しは目鏡に違ひたる。我身にくもり有事かと。心はちゞに踏迷ふ。思案の後へ
来かゝる蘭麝。【詞】ヲ、陵雲様爰にか。ヲ、けふと。何やらこはい顔をして。何を思案さしやんすへ。
これいな。
ェ、とつともふ。どふやらそんな顔してじやと。わたし迄心が済ぬはいな。コレ訳云て下さんせと。いへ
どこ
なたは一心不乱。【詞】たとへ匹夫の身なり共。我心さへすはりなば軍の成まい物でもない。ェ、何の事
じやぞいな。わしにいふてかと思へば。やつはりお前の独言じや。コレこちらむいて様子をとつくり聞
してと。
いへど答ず手をこまぬき。思案にふさがる一間より。覗く老居士見合す顔。障子ひつしやり。
（50オ）
【詞】ホそなたは爰へいつの間に。いつの間にとは情のない。さつきにから爰へ来て何をいふても思案
計。
お前の今のお心は。お師匠様を頼み。軍仕に行気で有ふ。もしそふ成たら命つく。わしと末
の約束した。お前の命は二つ有かへ。ム、。スリヤ今師匠へ願ふた訳を。ァイ残らず聞て居たはいなァ。
そなたといふほだし有て。先生には見限られ迚も爰には居られぬ陵雲。いつそ古
郷の蔚山へ。そなたと一所に欠落せふ。サァくおじやと引立る其手をじつと顔打ながめ。陵雲
さん。爰て殺して下さんせ。何と。大事を聞た此蘭麝。爰を釣出し道へ出て。殺す心で
ござんせふがな。それ程忠義をみがく。お前の功に成事なら。何の命はおしみやせぬ。爰で殺して
（50ウ）
未来の縁。結んで給はれ我夫とわつと泣出す口に手を當。【詞】スリヤ身が心を悟つたか。ァイ悟らい
でなろかいな。つらい公界を。派手にして。関帝様のお籤を。日に幾度か。うらやさん。畳さん
のと訳もない。浮気同士の。色事と訳の違ふた。互のかため。真で定めた女房も。見かへぬ
お前の底心を。知て極めた此覚期早ふ〳〵と一筋に。色に其身を空蝉の唐の。おやま
も意気地には命。捨るか性根なり。【詞】ホ、出かした〳〵。大事を聞しそちを手にかけ。我心元

を顕はして。義兵の数に加はらねば。思ひ立たる所存も徒。それ故貰ふそちが命。覚悟はよいかと振上る。【詞】ヤレ陵雲早まるな。娘出かした〳〵と。立出る主の居士。最前からの

（51オ）

様子残らず聞た。コリヤ望の通り。陵雲と夫婦にするぞよ。エ、そんならモウとゝさまといふてもたんないかへ。サアく是から唐天竺。日本迄も。天井抜。ほんの女夫じや。ヲ、嬉しい。〳〵〳〵。ア嬉しい。

【詞】ホ、悦びは尤。我娘といふ事。陵雲も嘸不審。彼に勤させたるも諸方人入込章甫の廓。よき軍帥を引入ん為の我計略。ホ、女に迷はぬ健気の振廻。遖々。今こそつらぬく袋の錐。コリヤ義兵を赦すと一言に。はつと二人が三拝九拝悦び勇む其所へ。響く人音慥に門弟。【詞】霊夢の安否正せし上其方も呼出さん。奥へ〳〵と師の命に。ハツト二人は打連て一間の。障子差荷ふたる三人が。汗に穢れぬ石のかろうと勢ひ込で。

（51ウ）

持帰り。【詞】サアく〳〵霊夢に任せ此かろうと。掘出したは此天慶。イヤ此雲関じやと我一に。師匠の前で。自慢顔。居士は立寄一々に見改めたる偃月の。中心に一聯ありくと。あらはす文字とつくと詠め。【詞】ハア奇成かな妙成かな。関帝此土へ再来の印を見する此数々。定めて召れし装束ならん身不肖の李如松が。蟄懐を助けんと。再び顕はれ出給ふか。ハ、、、忝し有がたしとしさつて。拝し奉る。門弟中進み寄。【詞】シテ関帝の化身の印は。ヲ、此偃月の中心の銘。二句の文字にあり〳〵と。化身の性名しるし有。ムウ其性名は連刀察か。天慶か。但しは此雲関でござるかな。ヲ、腹心の弟子の内。其身もそれとしらざるがそこが凡夫の各方。

（52オ）

披露は頓て。暫くそれにと老居士が。思案は深き奥の間へ従者がはこぶ装束は。何でもおれじやと三人が。いはず語らず心の我慢。しらせを今やと待居たる。折から。奥に

勤経の聲澄渡る音楽に。連て聞ゆる一間の内。逋関羽とざゝめく聲。連刀察恟し。

【詞】扨は関羽の再来は我々の内ではないか。天慶雲関。コリヤどふじやと□（革+可）れて三人。口あんごり。

【詞】ヤァく老居士が門人に再来なしたる関羽が化身。面躰見知と陵雲が。頭に戴く寿亭巾。緑の袍衣身に纏ひ。偃月の鉾つゝ立行粧。威風りん〳〵関帝の。魏の七軍をひたされし。昔も斯やと潔し。三人は二度恟り。【詞】ヤァうぬは匹夫の陵雲め。しやらく

（52ウ）

さい関帝呼はり置上れ。但し儕が化身といふ證拠が有か。ヲヽ此偃月の中心の一聯。

とう〳〵たる遺像陵雲に比すとしるした銘が慥な證拠。イヤサ儕を再来とは。どふやら気ぶさい師匠の心。霊夢といふが合点が行ぬ。誠の関羽かドレ。ちよつとためして見よふと双方より。得手に取付両人を莞爾と笑ふて蹴返せば。透さず窺ひ連刀察。打込帯釼拂ひのけ。命知ずのうづ虫と鉾を廻して一同に頭転胴骨打のめたれ。【詞】ァヽ申〳〵〳〵陵雲様。霊夢よりは其手の内。慥にこたへた腰の骨。くはん〳〵関羽に極まつた。御免〳〵と逃帰る。蘭麝は嬉しく走り出。【詞】ヲヽ出来ました〳〵。こちの人の関帝さま。私が

（53オ）

目利の恋聟は。こんな物じやとあをぎ立。悦びいさめは。こなたに居士は目もはなさず。【詞】ホヽ逋々。一度怒れば千里に血をなす。将の度量顕はれし上からは。王城を乗取たる日本勢は一まくりと。悦ぶ老居士陵雲いなんで。【詞】今を始めの一揆の企。雑兵士卒の手當有や。ホヽ其気遣ひは無用〳〵。すはといはゞ狼煙を相圖に馳集る。方便は斯と用意の鉄丸。はつしと打たる庭の面。真直に登る狼煙の。相圖とひとしく。鉦太鼓。【詞】ハヽ驚き入たるさそくの良策。和兵百万向ふとも最早恐るゝ気遣ひなし。シテ大将と調じ合せ和軍を包んで討ん時。長城通路の割符はいかに。ナニサく其割符こそ

（53ウ）

是なりと。渡せば取て押戴き。【詞】是さへ有ば通路は自由。早打立ん尤と。互の暇告渡る。鬨の聲々乱調に。響くはいかにと老居士が。見やる外面へ馳くる下官。息つぎあへず大音上。【詞】されば兼々承はる。相圖の狼煙に集る人数。思ひも寄ぬ横合より雲霞のごとく日本勢一まくりにかけ立られ。狼狽廻る味方の手勢。残らず落行。其内に。窟に籠し軍用金。兵粮迄も残りなく。焼失ひ候故。早速注進仕るきう〳〵〳〵。ぢゐんく。ぢよらい〳〵〳〵〳〵と引返す。【詞】ャァくく巌窟に籠置し兵粮軍用。手勢も残らず落失しか。コハくいかにと仰天し□（革+可）れて。詞なかりける。折から庭に生茂る夏

（54オ）

の。草木をからす蛇。竹にからまき這登るを。見るより面色土のごとく五躰すくんで恐るゝ居士。尻居にばつたり。巌頭へ落たる蛇に割たる巌。石下に行方。見やりもせず。【詞】陵雲居士に眼を付。三韓の李如松は蝦蟇の幻術行ふと。我日本にも傳へ聞。黒蛇の毒気にァノ巌。二つにさけしは。扨こそ〳〵。蝦蟇の精気を込けるかと。怪しむ詞。耳そばだて。【詞】ハテ心得ぬ。我日本とは紛らはし。陵雲そちは蔚山の匹夫ならずや。ハヽ匹夫共〳〵。大日本豊前の国彦山の麓にて。毛谷村の六助と云はおれしやはやいと。頭に戴く寿亭巾。かなぐり捨れは元服天窓。ふり乱したる其骨柄。和国の名物冨士山に。雲晴渡る。ごとく也。李如松は

（54ウ）

詰寄て。【詞】其又匹夫の六助が。何故此土へ渡りしぞ。【詞】ホヽそれにこそ方便有。其訳語らんよつく聞。此度異国征罰は戦場初めの此孫兵衛。待に待たる甲斐もなく。異国へ渡らば討死の印有との博士の詞。主君におしまれ何面目。武士の討死常なれは密に此土へ渡りしも。汝を謀長城の割符を奪はん我計略。ふか〳〵方便に乗たる其

方。最早遁れぬ覚悟せよ。何と〳〵と詰かくれば。ェ、口惜やなァ。さはしらずして残念や。
匹夫に大事を明せしも。娘が見立し聟と云。恩愛にとろかされ。末代豎子の名をなせし
と。無念の髪髭逆立て。怒れる涙は石火矢の火玉飛散ごとく也。娘はたまらず懐
（55オ）
剱を。のんどにがはと突立て。苦しき息の下よりも。【詞】とゝ様赦して下さんせ。お前に不覚をとら
せし
も。浅い私が心から。惚た因果は敵ぞと。まだ得思はぬ陵雲殿。東の果の日本も妹背
に。誠が有ならは。斯成行ぬ其先に。【詞】お明し有ばとゝ様に。願ふて割符を貰ふ物と。今更思ふも
迷ひの種。思へばさつきのお籤に。愚痴な心で云かはし。願ふるにしは末とげぬ。お告の有たは
前世から定まる業かと。かき口説もだへ歎けば。【詞】ャァ愚々。現在連添女房にさへ。深く包む一
大事。敵の娘に口外せふかャァそんならお前は日本に。残した女房が有かいなあハァ。ハッと蘭
麝かしどけなさ。見る目もくれて李如松が。骨随通る無念の歯がみ。【詞】三韓の仇娘か
（55ウ）
仇。儕匹夫め遁さじと。利剱を杖に立上る。手負は見兼たへ兼てコレのふ。〳〵と深疵に
舌ちゞまれは。手を合せ。父を拝みつ孫兵衛を。見上見下すたんまつま。千年の全盛から松の。盛りは
僅廿
年。夢も見果ず枯て行。ハァ、不便やと李如松が。恩愛離別は頭より。しゆみこん
ぢくの砕くる心地。死骸をひしといたきしめ歎けば。さしもの孫兵衛も。忠義故とは云ながら。
不便の有様見る事よと。両のまふたに。はら〳〵〳〵。汲取歎き唐日本涙は同し。涙也。孫兵衛
しをるゝまふたを拂ひ。ャァく李如松。迚も叶はぬそちか望。潔く切腹せよ。さもなくは手に
かけふか。サ、何と〳〵と詰寄ば。憤怒の形相尖き剱。腹に突立。無念の歯かみ。栄ふるも
（56オ）
亡ぶも時なれど。三韓の政道も取治めたる李如松が。小国匹夫にたばかられ。骸は爰に

さらす共。見よく最期の一念は。我学び得し術にとゞめ。日本に仇せで置べきかと。天に向つてつく息はふしぎや虹とたなびきて。中にあり〳〵李如松が。姿は東に。飛去ば居士が體は朝日の露。消て跡なく成にけり。かゝる折から表より三浦又蔵森本義太夫。めい〳〵生首引さげ〳〵。【詞】珍らしや孫兵衛殿。貴殿主人の下知によつて。日本に残ると思ひの外。此三韓抜がけし早打を以ての注進。遉高名去ながら。孫兵衛は故有て異国の渡海を差留置。早く日本へ帰せよと。正清公の仰を請て参つたりと。聞より孫兵衛勇立。【詞】主人の仰背くは恐れ。

（56ウ）

蝦蟇の術有李如松が。又もや日本へ一念の。仇をなさんもはかられず。我は是より帰朝して。猶も敵の根を絶ん。ホヽ出かされたり孫兵衛殿。則手柄の御賜。ヤア者共其馬引。ハツと答へて雑兵共。餝り立たる鮫馬の口取々に引出す。コハ有がたき主人の恵。是をや直に孫兵衛が。帰朝の魁紅梅鮫。赤きは。則赤兎馬に。そぐはぬ関羽が青月代。六尺ゆたかの大男見事。なりける【三重】姿也

六冊目

国乱れて忠臣顕わる。歳寒ふして松柏の霜猶帯て矍鑠たる。紀将軍晋伯は夫人王子を預りて。密に都を遠方の慶州の古都に楯籠り。必死に固まる上下の

（57オ）

士卒勢ひ。見へて頼もしき。晋伯が妻玉欄女年は六十の跡先に心を付てしとやかに。【詞】申夫人様必お案じ遊ばすな。都の軍も十が九つ味方の勝。夫晋伯付添ば。御身の上に気づかひなし。其上此唐土に一藝得たる者。数多味方に加はれば。此城をせめん事中々思ひも寄ぬ事。枕を高ふお休みと。力を付る折からに。武陽侯林官は和国の風に吹まくられ。ほうく都を落武者と。見ゆれど見せぬ勇士顔肩肘。強て打通れは。紀将軍奥より立出。互に拱手の礼をのべ。御挨拶は追ての事。先王城の安否はいかに。されは〳〵。何の一掴と存ぜしに。聞しに勝る日本勢。殊に鬼舎官めか鉾先に王城も乗取れ。牡丹臺も

（57ウ）

落花みぢん。大王様もけふの軍にはかなく御最期とげられしと。聞より皆々恟りし。餘り
の事の驚きに只忙然たる計也。晋伯はせき立て。【詞】シテく某へ御遺言でもなかりしか。
されば拙者も其場にて追腹と存ぜしを。おとゞめ有て仰には。晋伯と心を合せ王子を
守立。鬱憤を散ぜよと御遺言の重ければ。惜からぬ命をなからへ。漸是迄切抜し
と。聞に弥増夫人の歎き。姫宮太子諸共に。くはんぜ涙に玉欄女いたはりかしづく折こそ有。
門番の下官罷出。【詞】當城の主に對面せんと。貴田孫兵衛と申者城門に扣へたり。いかゝ計らひ
申さんやと窺へは。ハテ心得ぬ案内。何にもせよ軍中よりの使とあれは通さすば成まい。暫くか間
（58オ）
扣へられよと返答せい。早ふ〳〵と追立やり。晋伯は眉をひそめ。【詞】ムゝ合点が行ざる今の使者。察
する所某此所に籠城なし。旁を守護し奉れば。和睦の為の使者か。アイヤ只今告る貴田
孫兵衛と申は女でござる。したが武勇といひ器量といひ。女に稀成強敵にて士卒の死
亡数しれず。剰数ヶ城乗取稀代の曲者。何さ〳〵たとへ鬼神成とても。高が女の一人武
者先々庭先に罷通し。拙者が存る旨有ば。委しき事は奥の間にて。御親子も先奥へ。玉
欄女油断致すなと。物にたゆまぬ老将の。詞に随ひ林官も。打連立て入にける。峽
の月に恋まろぶ。人のつらきと裏表。園菊ははからずも貴田孫兵衛宗春と。異
（58ウ）
国に。咲す花ぶさの男成けり女武者。億せず上座に打通れば。玉欄女出向ひ。【詞】私事
は晋伯が妻玉欄と申者折あしく夫の持病御對面も致しがたし御用の趣何によらず
承はれよと夫の言付。ホゝヲ晋伯殿には御不快とな。然らは夫へ申述ん。此度和国の軍勢此
地へ渡り。石塁関所は。云に及ばず王城迄悉く攻取たり。然るに紀将軍晋伯。此城に籠り。三韓王
の王子姫夫人諸共守護せらるゝ志。遖健気に見ゆれ共中々籠城思ひも寄す。急き降参有ならは旁

の命は助得さすべし。異義に及はば軍勢を差向一戦に攻とらんと。主人正清が使者の趣。斯の通りとのべければ。

【詞】ハッ成程仰御尤。此方にも今日は降参の使者を向んと存る折から。とかく宜しくお執成。ヲヽ神妙の返答左も有なん。

（59オ）

併晋伯殿に對面もせず降参の證拠なけれは立帰つて主人へ言訳立ず。ホヽ御尤と立上り。一間の障子押開き。

遥下つて手をつかへ。【詞】これに渡らせ給ふこそ三韓王の御后梅夫人。降参の旨直々に。御意遊ばせと申にぞ。

梅夫人しとやかに。【詞】和軍よりの使とや太義〳〵。様子はあれにて聞しぞや。能にと計差うつむき跡は。詞も涙聲。園菊それと察し入。【詞】いづれも承知有におひては。久吉兼ての思召。三韓国手に入ば直様大明へ攻入。四百餘州を切従へよとの事なれば。急ぎ大明国への道の案内。御用意有といさましき。詞にあぐむ色目を見て。【詞】ムヽ降参と有からは地理の案内猶予はなき筈。但し降参偽り成か。ヤァく和国の使貴田孫兵衛。武陽矦林官

（59ウ）

それへ参つて對面せんと。襖あらはに武陽矦。ゆう〳〵とのさばり出。王城落去に三軍討れ孤城と成し此かまへ。危急一時と思はんか林官晋伯有上は。盤石にひとしきかため。其上軍中一能にひいでし者数多有ば。誠降参させんと思はゞ。我国人と器量をくらべ。勝劣によつて降らんが日本の小国。我大国に何としてく。ムヽハヽヽと嘲笑へば。こなたも莞爾と打笑ひ。【詞】ホヽヽ異国

人といふ者は仰山な物の云様。孫兵衛が召連し士卒の内にも。愚な者はない程に。まあ御自慢の一能を拝見が致したいヲヽ望ならば今目前。すべて合戦乱れし時。或は喬木林を傳ひ陣将をねらひ討。コレ軍法の第一なれば。其功を立ん者飛鳥の早業なくて叶はぬ。類猿参

（60オ）

れアット答へて立出る。【詞】いかに女。手並を見するは桂の大木。早業を見て後悔すな。それ〳〵と詞の下。心得類猿する〳〵と上るも。早足劉貞が。籏旌をつたふごとくにて枝に。下り梢をつたひ追風遅しと飛下り。林官はしたり顔。【詞】サア女ヶ様の業が和国の中に有やいかにと居尺高。ヲヽそれは何より安い事。孫兵衛が士卒の内斧右衛門とく参れ。アット答へももぎどふに。陣笠出立の雑兵一人。園菊が前に手をつかへ。【詞】あれにひかへて見物せし。唐の軽業お茶の子〳〵。【詞】斯しやちばつた枝骨へ。かけ付た迚上つた迚何の手間隙入ませう。こんな物かと桂の木。上る足取さゝがにや鳥も及はぬ早業早足。木つたふましら呼子鳥ひらりと。

（60ウ）

飛だる足音は。研に響く計也。林官驚き。【詞】ム、士卒に稀な逋しれ者。何者成やと尋ぬれば。陣笠取てしやにかまへ。【詞】ヲヽ聞たくば名乗て聞そふ。おらが事は音にも聞ん。大日本豊前の国。毛谷村に住なれし杣のお頭斧右衛門。ア、思ひ出すも涙の程。てこねたばさまの敵討。六助様の働きで。討て貰ふた其礼に。唐三界へ付歩行。忠義の手始今の木登り。サヽア何と肝がつぶれるかと。律気一遍山賤の。気性を切て投出したり。【詞】サア林官。約束なれば早降参。返答いかにと詰寄られば。暫らく〳〵。出るは唐士力士の聞へ。大地せばしとふんばたかり。【詞】我は異国のうごろ山とて大兵手取。日本にも某に続く手取が有やいかにと呼はれば。

（61オ）

斧右衛門はしたり顔。【詞】鼬川早ふく。アット答へて双方より。ずつしくと力足。こなたは異国の腕自慢唐と日本の土俵入左右に別れ扣ゆれば。気転利して斧右衛門。是幸と陣笠を時の軍配行司役。【詞】西は唐のうごろ山く。東は日本いたち川〳〵。双方見合せさつと引。早足を取て腕からみ。まつかせ合点とひつしよなく。蹴上てほどく手首投大地へどうど打付れば。叶はぬ赦せとうごろ山。うごろくと逃て入。林官いらつて。【詞】ヤアく異国の冠首伊達関。罷出よと大音上。ハットいらへて庭先へゆるき出たる。無双の大兵。斧右衛門聲高く。【詞】御用木出さつしやい。

ヤ

参りませう。とゆるぎ出たる大男。こなたは髭の大唐人。アッと入身に立向へば。負ず劣らぬ

（61ウ）

居合腰。諸手を取てねぢかゝる。身をかい沈んで袖返し。袖の浦波とたんの拍子。右へとつさり

御用木。大手をひろげ立たるは。いさましくも又仰山也。園菊はけしきを正し。【詞】サア林官。何と是

でも降参せぬか。サアくくと詰かける。時しも園が懐中に。音を啼千鳥香炉の不思義。

扨はと身構へこなたには。立聞晋伯林官も互に目と目見合せて。心を配り居たりける。

次に扣へし唐人原。鉄砲てん手に取まけば。兼て期したる園菊が。夫人の襟がみ引寄て。【詞】ヤア案

外成唐人原。降参に心赦させ討留ん計略有ても。それとしらする器物の奇特。火

蓋を切ば忽に夫人の落命是見よと。氷の刃胸板に差付く事有ば。差殺さんす其

（62オ）

勢ひ。【詞】ヤレ聊爾有な孫兵衛殿と。晋伯一間を立出て。【詞】ヤアにつくきは下官共此方の下知

をも待ず。私の了簡にてお使者に手向ふ慮外者と。せいする詞に下官共。手持不沙汰

に鉄砲を。皆揉消して扣へたり。晋伯は異義を正し。【詞】彼等が慮外は御用捨有て。必意根

に思はれな。サア今こそ改め誠の降参。イヤ降参呑込ぬ。温順を以て取計らはんとわざ〳〵

来る使者に向ひ。謀し討とは比怯の振廻。軍例を知ざる犬唐人。此上は軍勢を以て一

戦に攻取んと。見向もせざる不敵の女将ゆう〳〵ぜんと立帰る。【詞】ァ、ヽ晋伯殿手ぬるい〳〵。此林

官が申ことく。有無をいはせず一討になせ討殺して仕廻召れぬ。アイヤくそふでない。何にもせよ使

（62ウ）

者の様子承らぬ其内に。うかつには手向ひならず。一くせ有者共も。皆日本に仕負し上。手

筈の相違も是天命今更悔んで返らぬ事。カ孫兵衛が今の一言。差當つて捨置がたし

と。舌も引ざる其内に。遥に陣鐘。攻太鼓。【詞】ヤアヤレく聞れよ。遠音に響く攻太鼓。早敵

軍の押寄しな。ア、イヤこれ〳〵晋伯殿。軍卒多き王城迄。乗取程の和軍の勢ひ。叶はぬ敵

對せうよりは。兜をぬいて尋常に。降参するが近道〳〵。ヤアたとへ運盡落城なす共。一戦に及はずして。降参するは国の恥辱。某は追手に向ひ。一合戦致す内。足下は是にとゝまつて。城中警固

搦手の。要害堅固に玉欄女。御親子の守護肝要たり。必油断致されなと心はちゞに。

（63オ）

気配り手配り。義を金鉄に晋伯は。追手をさして出て行。林官跡を見送つてわさと励

みの聲高く。【詞】ホヽ面白しく。晋伯追手を防がるれは敵何万騎寄る共。攻入事思ひもよらず。

【詞】搦手は此林官。たとへ楠義経か智謀計略有にもせよ。只一戦に追ちらし勝鬨上るは手裏

に有。【詞】イヤナニそれより先に太切成。大王の御遺言。梅夫人へ密々に。仰置れし一義有。玉欄女は

暫く

退座。御合点成かと真顔なる。詞の主命是非なくも。二方伴ひ入跡に。林官かしたり顔。

傍り見廻し小聲に成。【詞】イヤナニ梅夫人様。サヽヽ近ふお寄なされ。人に洩さぬ密々の御遺言。サア近

ふく

に別れにし。其深閨の戦方を。思ひつゝけて傍に寄。【詞】シテ密々の御遺言。御最期の様子は何と

（63ウ）

しやいのふ。サア其御遺言と申は。定めし姫や王子の事。お心にかゝつての。御遺言で有ふのふ。ヤサ其

義は。但しは又自へ。何ぞ深き思召か有ての事か。サア。ちやつといふて聞しやいのふ。成程其御遺

言と

申は。御遺言とおつしやるは。其御遺言は。こふおつしやつたと抱付。其手をゆうくふりはなし。【詞】

ヤア穢ら

わしい慮外者。スリヤ御遺言といふたのは。ヲヽ嘘しや偽りじや。今日本の軍勢に。王城は乗とら

れ。此城も追付落城。首と胴とに成ふより。降参すれは恙なく。こなたをおれが妻となし。コレ

此むしやくしやした髭も剃。月代剃て小りゝしい。逓業平園部にも負ぬ男の日

本風。おなびきなされ夫人様としなたれかゝるうたてさよ。【詞】ヤア狂気なしたる武林官。心を痛める

（64オ）

敗軍に非道の恋慕も情なや。君に別れて便りない。女と思ひ儕等に。侮らるゝか浅間し
やと。御身をうらむ口惜涙。面を帯たる海棠の姿うつろふ計なり。【詞】其目元なら口元なら。惚
たが無理かたまらぬと。寄んとするを飛のいて。懐剣逆手にふるひ聲。【詞】無礼仕やると赦さぬそ。
ヤァそつちよりこつちかとふも赦されぬ。もふ斯成たら破れかぶれ。いやと有ば美くしい。玉のはだゑ
へ此剣。
ひやいな目に合ぬ内。ヲヽとおつしやれく。イヤくく。殺さば殺せ殺されても。何の心にしたかはふ。不
忠者
の其方は。自かまつ斯と。突かける懐剣を透さず宙に打落し。おとしの剣思はすも肩先
すつはと梅夫人。切れてかつはと伏給ふ。出合頭に玉欄女。【詞】ヤァお主をあやめし大罪人。そこ動く
（64ウ）
なといふより早く。鉾追取て突かくるを。身をかはして二打三打コリヤ叶はぬと林官か。用意の
鎖眼潰し。打込鉄丸こなたの請身。はづれてはつたと胸板にかすつて當れは玉欄女。たち
〳〵〳〵とひるむ間に。逃指よしと林官は。跡をも見ずして遁れ行。玉欄女は起上り。いつく
迄もと追かけしが。立戻つて手負の耳。【詞】夫人様。お気を慥に梅夫人様と。呼聲もれて姫
君王子。戻り出るより縋り付。【詞】母上様いのふ。夫人様と三人が。おろく涙に取みだし前後。不
覚の其所へ。斯共しらず晋伯は。身の毛とおふたる心はやたけ。数ヶ所の深手急所の疵口。
攻口漸切破り。戻りかゝつて此場の躰。一目見るより。【詞】ヤァくく何故夫人の御手疵。様子は何と玉
（65オ）
欄と。尋る其身も深手の苦痛。見るより恟りヤァくく此有様は何事と。歎く玉欄。梅夫
人。【詞】待兼て居た晋伯と。のたまふ聲と諸共に。懐剣のんとに突立れは。夫婦が仰天二方も。
一方ならぬ御歎き。夫人苦しき息の下。【詞】ヲヽ驚きは尤ながら。アノ人でなしの林官め。大王の御
遺言と偽つて。無躰の恋慕に思はぬ深手。是幸と自害するも。足手まとひの
女の身。自故にもしひよつと。姫も。王子も。むさ〳〵と敵の擒と成ならは悲しい憂目を見

よふかと。覚悟極めた此生害。【詞】二人の身の上。くれ〴〵頼むは晋伯夫婦。是か此世の暇乞。姫も王子ももふさらは。千年も万年も。無事で長生してたもと。の給ふ聲もだんまつま。無

（65ウ）

常の風にさそはれて。花の姿も玉ゆらもたへてはかなく成にけり。わつと計に二方は。あへなき

死骸に取すがり。母様お隠れなされたら。わしも死たい。〳〵と歎かせ給へは抱しめ。【詞】ヲヽ可愛の和

子やいたはしや。よふおつしやつた。〳〵其様におとなしう。生れ付のも親々に早ふ別るゝ故成か。何の因果に生残り。かゝる歎きを見る事やと。姫君諸共聲を上歎けば共に晋伯も。取乱

さじと喰しはれどまふたつらぬく涙のあられこたへ兼しかはら〳〵〳〵前後。正躰泣沈む晋

伯漸涙を拂ひ。【詞】チエヽ死したり残念や。モ此躰にては中々籠城叶ひがたし。コリヤく玉欄。是こそは三韓の印璽景圖の一巻。某都を落る時。大王私を密に召れ。我もし不幸の事有は

（66オ）

此印璽を王子に附属し。籏上せよとの御仰ハヽ畏つたと請合しか。斯成上は。ぜひもなし。【詞】其方

二

方の御供申。大明へ密に落行。時節を待て再ひもとの。三韓王と仰ぐへし。心得たるかと夫の覚

悟。聞にたへ兼玉欄女。【詞】育君といひ姫君様。命にかへても大明へお供はせふと思へ共。現在夫

の御最期を見捨て是がどふ行れふ。赦してたへとむせ返れば。【詞】ヤア此期に及び未練の一言。長居し

て不覚を取か。サアく落よとく落よと。励しき詞にせひなくも。印璽を佩せ参らせて。杖よ。小

笠よ旅用意。我夫さらばと立兼る。連枝の歎きはゝきゞの有とは見へて亡骸の。三世と

二世に一世の別れ。跡に。見なして裏門へ心細くも出て行。同し歎きに見送る晋伯。延上り〳〵。

（66ウ）

【詞】最早行たか早落たか。いさみを付んと呵り付。落し事は落したれ共。當途もしらぬ長の

旅。殊に女の身一つで。御二方の御介抱。さぞ便りなふ思ふらん。【詞】是に付ても思ひ出すは。日本

に残せし悴。仙石権兵衛と名乗。久吉の懇望も二君に仕はぬ魂より。其侭に打捨て。此土

に帰り此ごとく。老て恋しき我子が今此所に有ならば。逋片腕に成ふ物。逢たや見たや不
便やと。恩愛血筋の涙の原。取乱したる男泣不覚の。涙にくれけるが。【詞】ハア誤つたり未練のくり
言。最
期の軍。潔く討死せんと。よろめきながら取出す。硯の海の底深き。思案は誰か白紙に。さら
〳〵〳〵と書認め。兜の鉢にしつかりと。紐引結ふ後の方。伺ひ寄たる林官か。物をもいはず切
（67オ）
付れば。心得たりと晋伯が。尖き鉾先あしらひ兼。よろめく所をなぎたをし。足下に踏付はつたと
白眼。譬ん方なき極重悪人。忠義一途の晋伯が。刃の切味覚へふと。とゞめをぐつと左右より。
ソレ遁すなと日本勢。當麻竹偉と追取巻。ヲヽ合点と渡り合。深手にたゆまぬ老武者の
刃金時をぞ【三重】移しける。古都城外は人たへて只鯨波矢叫びの。音物すごく聞へけり。【詞】王子
様
のふ。姫君様。王子様と。呼聲迚もうらがれて狂気のごとく玉欄女尋ね。さまよふ其折から。
城中に聲高く。紀将軍晋伯を貴田孫兵衛か討取たりと呼はるにぞ。ヤア。スリヤ我夫には御最期か。
ハア。はつと計に胸せまり。心苦しき其折から。それとかけ聲取まく追人。女めやらぬと。切込を。
（67ウ）
こなたも石火の刃先と刃先。暫しが程は打合しが。切立られて雑兵共逃るをやらじと追て行。
寄手の大将貴田孫兵衛。たやすく當城乗取て。早凱陣の引鐘に。紀将軍が皺首
引さげ城門ひらかせ立出れば。跡につゞひて雑兵共。数多の唐人珠数つなぎ。追立出て手をつかへ。
【詞】討もらされの毛唐人残らず搦捕上は直様是より御凱陣。三韓国も一戦に。手に入誉
勝鬨〳〵。ハイく。ワア勇いさんで【三重】立帰る
七冊目
三韓第一の絶景たる。匹良哈の陣屋を預る貴田孫兵衛宗春と。夫にかはる園ぎくは。
慶州の抜がけに官人数多擒とし。大将よりの御下知を。待間も油断啼鷗戚も。山辺も

（68オ）

白妙に。春にすねたる梅椿 紅ひ埋む雪景色。浪の鼓の音添て。和国に稀な詠め

かな。風雅気のない番兵共欠びたら〳〵何と可内。初手に此国へ渡つた時は。ほへん吹様な物

いひでなんだか一向しれなんだが。長陣に居馴染だら。アノ牢に詰た唐人原が寝言迄。譯

士いらずに聞覚へたが。聞及んだよりは弱い国。あれを見ては豕のこくせう羊の濱焼。麒麟の

糟漬山嵐のてんふらなど。油ぎつた物計喰てもめつたに力にはならぬはいの。イヤくそりや弱いの

じやない。おいらが勇力がゑらいのじや。イヤ其ゑらい次手に。とんと合点の行ぬはおらが大将。名は男

で其身は女。どふでも彼物が二つ有二なりとは思はないか。アイくコリヤずは〳〵いふな。そんならわい

らはまだ

（68ウ）

曰因縁をしらないか。イヤしらぬ〳〵。ハテアノ宗春様といふが前方評判の有た。毛谷村の六助殿

のお内義だはい。ヤアソリヤあの九州で敵を討た。一味斎の娘か。我折。そんならやつぱり女だ。其女が

貴田孫兵衛宗春と名乗はいかに。サア其貴田孫兵衛といふが彼六助殿。今度日本に残られたは

どふでも中風でも發つたか。そこでお内義が名代に男にかはつて軍するも。女に稀なアノ大

兵。力が強ふて剱術は天狗もめつたに及ばぬげな。シタリそれて理屈が聞へた。聞ば聞程女の

吉粋。男の名を三韓に上るとは 遖 貞女だ。それに付てもおらが嚊めは。此権内を恋こがれ。

松浦の山のていぺいで石には成て居まいかと。【詞】掴み立る様にいにたふ成た。必未練比怯なものと

（69オ）

笑ふてくれな面目ない。【詞】何の〳〵家を出る時は妻子を忘るゝとは。どつと昔の事。案じるは相互

だ。定め

て国元の妻子共も。けふや三韓を切従へて戻るか。翌は唐人の首引さげて帰るかと。待に待ている

證拠は。朝も晩もやたらに嚏。仕た上は仕〳〵。古い嚏と新らしい嚏とが一つに成て。ハアくつさめハ

アくつ

さめと。俄に恋しい日本を。見やれど見へぬ雪日和。皆々しゆる折こそ有。遠見の軍卒あはたゞし

く。御注進と呼はれば。園菊一間を立出て。【詞】ヤア心得ぬ火急の早打何事成ぞ。ハア蓑笠に
面を包み。錦の一巻を隠し持たるあやしき老ぼれ。蔚山の麓にて見付候。いかゞ計らい申さん
やと訴ふれば。ムウ合点の行ぬ。定めて王城の落人ならん。者共ソレと下知につれはつと一同にかけり行。
（69ウ）
園菊跡を見送つて。心赦さす悠々と火鉢引よせ座に直る。程もあらせす玉欄女。多
勢が中に取巻れ。【詞】ハイく御赦されて下さりませ。サア隠した物出しおらぬか。イエく何にも隠した覚
へ
はござりませぬ。御赦されて下さりませ。【詞】ヤア何所へくにつくい老ぼれ。サア出さぬかと詰寄ば。
園
菊もきつと見下し。【詞】コリヤく女悪い了簡。たとへ此場を切ぬけんと。老て麒麟の勇有共。十人で
手に合ずば百人。百人で手に合ずば千人を以て取囲む。サア所詮叶はぬ所なれは。何かはしらず其一
巻尋常に相渡し。具さに子細を白状せば。事により助くれんと火鉢に手くさ優美の問
状。無理ならね共身の上を明せば我身計かは。姫君王子の御難義。とや詮方も極まる切羽。手
（70オ）
早く一巻火鉢の中。扨こそ曲者遁すなと打てかゝるを抜合せ。ひるまぬ忠義の一念もかよ
わき老の足つまづき。かつぱど転ぶを起しも立ず。ついに縄目の玉欄女くいしはりたる口惜
涙。【詞】ヲヽ出かした〳〵。そやつ詮義の有やつなれば。ソレ策中につなき置。畏つたと大勢が引立跡
や
雪道を。心もなげに踏ちらし。のつか〳〵と山口監物。正清公の御上意と。いかつがましく打通れば。
園
菊異義をかいつくろひ。【詞】王城より遥の長途。今日は取分雪中。御苦労ぞやと挨拶すれば。
イヤ雪て有ふが風が吹ふが。ちと骨の有役目なればちつ共くつたくにも存ぜぬ。正清公長陣
のつれぐ。貴殿を事かけにせふと思ふてか。よつ程贔屓な御上意と。例の悪口脇へそらし。【詞】シテ
（70ウ）

御上意の趣はな。サア其子細と申は。慶州の古都とやら三味線とやらへ抜がけして晋伯とやら
いふ毛唐人の首拾ふてござつたを。殊の外御賞美有て。諸将へもふいてうの上。此度大明四
百余州へ。攻入先陣を仰付られ。當砦に生捕有唐人原。日本の規模相立様勝
手次第に致されよとの御上意。何と貴殿には過た役目。ちと贔屓ではござるまいかと。嘲
哢半分底意には。偏執我慢のあて詞。頬憎しとは思へ共脇へかはして。【詞】有難い御上意。女でこそ
あれ。貴田孫兵衛宗春と夫に代る此園菊。大明の先陣給はりしは此身の面目。武士の
誉。ヤヽコレくそりや了簡違ひ。稗雑水くらつた三韓人とは事かはり。大明のやつらは分別がござる。
（71オ）
智恵といふ物か有ぞや。軍始めにけち付て諸将の物笑ひとならんよりは。なぜ辞退
さつしやれぬ。女さかしうて牛賣れぬ。出廻たは見苦しい物でござるぞや。是は御深切なお心
付。忝ふ存しまするとサ申たけれど。此義はどふも御辞退は申されませぬ。なぜな。サア當砦
を預るは取も直さず貴田孫兵衛宗春。明兵を恐れ辞退致せしと沙汰有ては。夫の面
目失ふ事。左様はお請申されませぬ。よし又園菊なればとて。高が知た唐人の手並。百千万
向ふ共千里か竹の竹の葉一枝。もき捨るより安い事。味方の内にも狼狽た億病未練
な音の。お眼覚さして見せませうと。和らをまぜて書たるは。花も実も有其返答実
（71ウ）
宗春か奥床し。監物は口あんごり。【詞】そんならこなたが軍師に成て。アノ大明を攻るしや迄。縁
なき衆生は度しかたしじや。ドリヤ休息仕らふと胸に剱の監物は其座。尖に立切障子。園
菊跡を見やりもせず。【詞】マアく者共正清公より勝手次第とお任せ有し擒の面々。残らず是へ
引出せと。下知より早くばら〳〵〳〵。左右の牢屋に立かゝり。引出す数多の官人原髭ほう。〳〵
と色まつ黒。畑て束ねた頭芋。つらりと庭へ引すゆれは。下官原に打向ひ。【詞】一旦擒とせし

其方達。助返す謂はなけれど。又味方へ降参さして益なき者共。殊更日本へ連かへらは銘々の妻子。跡の歎き不便なれは。某が了簡を以て。其方達が耳をそき。日本へ送り

（72オ）

一つの塚となし置ば末世末代日本の誉。規模さへ立ばそちか命は助得さすると。聞より周障る唐人原。豆腐のふちか何ぞの様に。沢山そふに人の耳。つい切ふとは聞へぬ仰。あんまりむごいと一同に口説歎けは韓夫藉。物知顔に進み出。傳へ聞国性爺は千里か竹の林にて。韃靼勢を切従へ日本風に月代剃。命を助し例も有。耳のかはりに月代で。御了簡は成まいか。ヲヽそふじや〳〵。我々が木くらげ耳何ぼうお取なされた迚。干物屋へも行ぬしろ物どふぞお赦し〳〵と。口々歎く後より。素桐賓は分別顔。【詞】ァヽコレ皆悪い合点じや。こなた衆が耳をいやとイヤると首とらるゝか二つには可愛い妻子に引別れ日本へ行ねばならぬが。中々近い事ではない。三千余里の

（72ウ）

あなたとや此世の對面思ひたへ。長い別れをせにやならぬ。むさとめつほういやんなと。心遣ひぞ道理成。可内はむくりをにやし。【詞】ェヽやかましい唐人原。サァ首取ふか耳そごふか。サァそれは。サァくくどふじや。ァヽ侭よ。命の代りの耳じや。鼻かんだと思ふて皆そいでもらやいの。サァそんならきり〳〵直つたく。ハイく左様ならばお辞宜なしに。もしあしらふておくれなされと。いふをも聞ずかたつぱし剃落されてきやつくと。目をまはすやらほへるやら訳も。たわひもなかりけり。【詞】コレく素桐賓丸子官が目をまはした。丸子官やい〳〵。耳返そふと呼はれは。息吹かへす。丸子官。【詞】ナニ耳戻して下さるとや。ドレく何所にとなで廻せは。イヤ其耳はコレ爰に。断云て貰ふたれど。貴様の耳では

（73オ）

ないぞや。サァなまくしきしもやけの此耳。年寄が貰ふて益なき物と思ふてサァ外にほしがる。人もあろ。此義をとくときくらげ耳と差出せば。コハ冥加なき仕合せと。いたゞく右の片耳は耳の片つ方を落方の。軍に討死仕たかはりといたゞきなからしほ〳〵と。立あがり

しが。【詞】コレく皆の衆。もふくやんでも返らぬ事じや。べた〳〵せずといつその事。拍子にかゝつていのふでないかよかろ〳〵と一同に。そくしんしげもくるゑんさい八もくさいはいきりりや。きんなんおと

わにてんもくさゝがにやれきんた。うかれ打連出て行。跡から風に誘はれてらつぱちやるめら吹そらす。聲遠方に聞ゆれば園菊きつと耳そばだて。【詞】大明の軍勢寄るぞならば。鉦太鼓

（73ウ）

聞ゆべきに。怪しやそれに引かへて。アノ物音の近付は何にもせよ心得ず。遠見〳〵と下知につれハツト一度にかけ出る軍卒。【詞】ヤレく大明の方より同勢凡百人計。幢幡風に吹なびかせ此所をさして参る躰。正しく降参と相見へます。イヽヤめつたに油断はならぬ。降参と見せ陣中を探るは侭有謀。其謀によつて謀を行ふが軍法の奥義。敵向ふと聞甲冑は億すに似たり。いざ〳〵衣服を改めんと騒がす一間へ入跡を。見すまし立出る監物が相圖の呼子にこなたより。窺ひ出たる弟軍蔵前後を見合せ。【詞】兄者人。シイ聲が高い。シテ大明との手つがひは。イヤ気遣ひさつしやるな。全羅道の関道より彼地へ立越。まんまと大明と一味

（74オ）

合体。今日則使者を送るは。一つの難題を以て先園菊を仕くじらせ。其跡はコレかう〳〵。ヲヽ出かした〳〵。一足飛の立身。仕おふせたら日本は岸沢。我々は此三韓を仕てやる積り。斯腹の病ぬ様王子めが行衛を尋ね。見付次第に打殺せぬかるな。合点と強悪無道別れて入や陣門に程なく近付数多の人音。和軍の智恵を計らんと。着たる葛巾大明の軍師と見へし。孔明出立。文字彫たる額かい込で。柵外に立はたかり。

【詞】大明の軍師李甘陵。當砦の大将に見参くと。呼はる聲に園菊は衣服。改め歩み出。【詞】大明の軍師来りしとは日本の武勇に聞おぢして。降参の為来りしかと。其さま

（74ウ）

きつと述ければヤァ降参とは舌長なり。【詞】此甘陵が来りしはさいふ腮に髭をはやし。返つて沓

を取さんため。下主の智恵は跡からとほへ頬かはかぬ其内に。降参せよと詰寄ば。園ぎくはちつ共動ぜず。大明は四百余州。六十餘州とくらべては国は遥ちいさけれ共。我日本の神兵は一人万に敵すれば。大明はおろか天竺に手長足長が加勢して。万国ひとつに攻来る共何条共思ふべき。ムヽハヽヽ。扨こそ奥なき日本の智恵。力を頼み争ふは高が匹夫のわざくれ事。我国の孔明は軍配一つで百万騎を自由に動かす謀。智仁を兼る文道は唐士に及ぶまい。叶はぬ事と云込れば。ヤア日の本に文なきとさみするそちが盲同然。汝が国の白楽天を筑

（75オ）

紫の沖より追帰せし。住吉の神のいさをしはきぬく山の御詠哥。今につたへて慥な證跡及ばぬ異国の智恵を以て神の御末の国人に。云勝んとは愚々と云ひしけば。ヤア面白い。左程廣言吐其方コレ。此額に彫付た詩の絶句は讀まい〳〵。若讀たらば降参せふ。讀ずばうぬが首を取サア。讀るなら讀で見よと。目先へずつと差付る額の文字は上を下。次第不同に書たるは扨は巧に乗たるかと心は付ど下らぬ文。いつれの字より讀初んとうろつく心浮れ船たゆとふ返答當惑に。してやつたりとこなたの一間胸に監物。舌なめずり。思案の園菊思はずも見合す驚くはたとさす。生死の境一世の瀬戸。サアとふじやサアどふじやと。

（75ウ）

せり立られて口惜さ無念の眼血走りて見れ共〳〵礫文字方角難義難文の。もし此額が讀ざれば我身計か日本の恥を残すか誉れとなすか。二つのせつぱは此身の浮沈。なむや彦山大権現我身の命何惜まん園が千年の寿命をばけふ一日につゝめ給ひ。何卒救ひたび給へとこらす一心念願に心筑紫のあなたの空。見やれどしるしもあらざるはよくも武運に盡果しと無念のはがみ。髪逆立物狂はしき。其有様下官共一同。【詞】ヤア蛙は口から日本が負た〳〵〳〵と打笑ふ。かゝる時しも鳩一羽。いづくよりかは飛来りあなた。こなたと庭

の面。雪間に求食其風情。園菊きつと目を付れば。はつと立たる鳥の跡ふしぎや文字あり

（76オ）

〳〵と。【詞】陌頭楊柳の枝已に春風に吹る。妾が情正に断絶す。君が懐なれぞ知事を得ん

【詞】ヤア其額が讀たかと。驚く甘陵下官原俄にぐんにやりふるひ出す。こなたはそれと気も付ず

ハテあやしや。【詞】尤文字は鳥の跡と。古き文にも見へたれど。あり〳〵見たるは今が始め。正しくこりや

是唐詩の絶句と。見合す額の乱文をよく〳〵見れば同じ文字。【詞】ヤアくく扨は彦山権現の

鳩に御身を現ぜられ。此場を救ひたびけるか。チエ、有がたい忝いと心の内に仕拝み。きつと見渡を

唐人原詞にも似ずかけ出すを待と一聲園菊が詞は頭に落くる雷。わつと計に我先と

憶病風を追風とし尻に帆かけて逃帰る。跡にはほつと張詰し。心ゆるめは崩るゝ所躰。

（76ウ）

ア、嬉しやと媚かし。時も又も。さへ返りちらめく。雪は心なき。身にも哀れを告渡る。鐘つく

〳〵と。独言。【詞】ほんに浮世は車とはよふ云た譬じやなア。此唐土へ軍立は文禄の始の年。夫は

異国に討死のしるし有と博士の詞。士卒の中に立紛られ此三韓へ渡つて見れば。夫は残ると

聞嬉しさ。扨は日頃の孝心を神や仏のひかへかと。嬉しい中にも残念は億病未練と世の人

の。笑はん事の口惜く。正清公へお願ひ申。貴田孫兵衛宗春といかめしい軍帥顔。算へて

見ればモウ三年。噂に聞ば三韓へ渡つていてさへ便りもせず。又日本へいぬるとは。思へば気強い

孫兵衛殿。水のかはりて病ひでも發りはせぬかと只一筆。問てくれてもよかろうに。送つた

（77オ）

文の返事さへないはどふした心やら。知ぬ異国に女房がこがれて居る共思はずか。むごい夫とため

〳〵を人の見ぬ間にかきくどきわつと計に歎きしが。はつとあたりへ心を付。【詞】是はしたり。軍帥

を忘れて退た程にの。ア、ひよんな事思ひ出した。添ぬ昔も有た物と。口ばつかりはあきらめ

ても心は添ぬ折からに。韓の帝の夜の道。照す蛍のそれならて。雪路に迷ふ三韓の。姫

君や若君は。花の都をちりぐに。玉欄にさへ引別れ。ならはぬ道も暮かゝり。差かゝりしは日本の。砦としらず白雪に。歩み悩ませ給ひける。斯と見るより監物はのつさくと歩みいで。

【詞】ヤイくがき共何所へうせる。ムウ見た所がまんざら。百性のがき共見へぬ扨こそ〳〵。儕らは慶州よりの

（77ウ）

落人。姫王子で有ふがなと。見透す詞に二人はおど〳〵。赦してたべと逃行を【詞】コリヤやい〳〵もふ叶は

ぬ。日本の砦としらず網にかゝつたうぬらが不運。サア有様に白状せい。白状ひろけと立寄を。【詞】監物殿お待なされ。なぜ留さつしやる。イヤ全く留は致しませぬ。が三韓の姫王子が。どふ狼狽て爰へ参らふ筈がない。もし人違へならば何となさる。ヤそれは。サそれじやによつてお留申た。マアく暫らくお扣へと詞を和らげ二人に向ひ。コリヤ稚い者よふ聞よ。此所を日本の砦と知らず。差かゝつたはそち達が不肖。姫宮王子に格好似れば。吟味とげねば帰しはせじ去ながらあしくは計らひ得させぬ間。先其腰に帯たる物は。いか成物ぞどれ見せよ。中改めて得させ

（78オ）

んと。事を分たる園菊が。詞を王子は聞分給ひ。【詞】ヲゝ其様に云てくれるによつて。是は大事の物じやけれど。そちに計見せるぞと。渡せば取て押開く内に輝くあやしの物。篆字を以て

彫たるは正しく噂に聞及ぶ。三韓王の印成かと。胸にきつくり猶豫の躰。【詞】どふでござる園ぎく殿。手がゝりにでも成ますか。イヤケ様な物でござります。ムウソリヤ何じや。孔雀の玉子の押

切判か。合点の行ぬ物でござる。左様でござります。さしたる證拠共見へませねば。氏なき者の

子と見へます。イヤそふ計では相済ぬ。監物かはつて一せつぱ骨をひしいでいはせんと。ひしめく折から

暮六つの。拍子木既に告渡れば。【詞】監物殿お待なされ。何だ又留しやるか。イヤ留は致さねど。

（78ウ）

日も暮たれば詮義は明日ムウ日が暮たら落人の詮義すなと日本から。仰渡されでもこざつ

たか。イヤ左様ではござらね共。此所は大明の砦なれば。敵方より何時不意を打まい共申されぬ。取分夜中は猶大事。手配り万事心を配りしづまり居るが味方の要害。いか様そこもござるはい。ヱヽ骨をひしいで云せてくれんと思つたに。よい〳〵仕様が有。ソレ家来共。二人のがきめら

くゝし上。左右の木へ繋ぎ置。いたはりなく今宵一夜。雪責にせい早く。〳〵といら立下知。聲

より先へ胸こゞへがち〳〵ふるふ兄弟を用捨も荒縄あらしこ共。泣も詫るも構はゞこ

そ。引立く引分られ。【詞】コレ申拝みます。たとへ死共兄弟一所。一つに置て下され寄んと。すれと

（79オ）

引戻す縄は呵責の身にかゝる。雪に苦しむ其有様。おとなげなくもよい気味顔。【詞】ムウどいつも

こいつも寒いか〳〵。それがいやなら有様に。姫王子と白状せい。ハテ打捨てお置なされ。冷こらへ

絶兼なば。あの方から白状致す。先それよりは砦の要害。イザ陣廻り致さんと打連てこそ

入跡に。むざんやな兄弟は。互にあこがれ身をもだへ。【詞】姉さまいのふ。弟若いのふと。いふ聲

さへも冷

とぢて目も當られず。いぢらしし。姉君苦しき聲音を上。【詞】ノウ弟君。お前より此姉は。衣一重

厚ふ着てさへはだへを通す此大雪。餘尺もない身は殊更に。冷こゞへてたまるまい。【詞】此手が自

由に成ならば。お前に脱で着せたいけれど。ヱヽどふもならぬ。わしが身に有此衣を。お前の身に

（79ウ）

着たと思ふて。辛抱して給はれと。いふもわな〳〵おど〳〵と歯の根も合ぬ。ふるひ聲。王子はふるふ

聲隠し。【詞】イヱく。我は寒ふはござりませぬ。そんな事は気遣ひせずと。お前の身を大事に。風引て

ばし下さるなや。ヲヽおとなしい事よふいふて給はつた。其賢い詞をば。父君や母君が草葉の陰

からお聞あらば。何ぼう嬉しう思召ふに。ァヽ思へばく浅ましや。三韓の王子姫君と持はやされし

我国も。日本人に切取れ薄の穂にも落人と成。やつれたる我々を。【詞】縛れくゝれと父君の。御

恩も忘れし下々の。中に漸国の恩知たる者の情にて。遁れし難義は幾所。【詞】玉欄女の行衛
さへしらぬ旅路に踏迷ひ。思ひも寄ぬ此つらさ。【詞】玉欄女が居やつたら此難義は救ふ物
（80オ）
何所にどふして居る事ぞ。玉欄のふと姉弟が。爰に居る共白雪に身を投ふして泣慕ふ
心ぞ。思ひやられたり。人なき隙に玉欄女縄すり切て走り出。申くお二人様。私は爰におりまする
ぞ。ヤアそなたは玉欄女。我はどふして爰に居ると飛立姉弟。ヤレ聲高におつしやるなと。邊り見廻し
紅梅にからむ王子をとく〳〵と御手を取て。差足抜足心を配りこなたの椿開く御運も一同にい
ましめとけば御両所は。嬉しさ余つて取縋りわつと計に泣給ふァ、コレ申。【詞】是程迄に仕負せたれば
もふくお泣なさるゝな。斯いふ内も気づかひな。見付られたら又難義。サアくお出遊ばせと立上りし
が心付。【詞】ヤコレ王子様慶州の都落る時。あなたに帯させ参らせた。印璽は何所へおやりな
（80ウ）
された。イヤ其印璽は弟君が。最前爰へ来た時に。日本人にお渡しなさつた。ヤアくく何。それを
渡してよい物か。エ、いかにくはんぜがないとても。コレあの印璽がござりませねば。此三韓の再び
御代はつがれませぬぞへ。ハア其印璽を取たるは此砦の大将。ヲ、そふじやと極る忠義の一念。見
やる向ふへ落たるは慥にそふとかけ寄て。【詞】抜目もない日本人が此印璽を落して置たは。いまだ御
運
が尽ざるか。エ、忝いと押戴く。後へぬつと山口監物ヤアどこへ〳〵。【詞】慥に聞た三韓の姫王子に
極まつた。遁れぬ所と討てかゝる。どつこいそふはと玉欄女。落たる剱にてはつしと請。たゆまず
さらず蝶鳥の。翅と打合其所へ。いづくよりかは白羽の矢胸板はつしと監物は。うんとのつけに倒れ
（81オ）
伏。コハくいかにも敵の中先暫くと御両所を。木影へ忍はす間もなく。障子をさつと園
菊が。異国に武名立烏帽子。大紋の袖ゆう〳〵と弓矢。手挟立出れば。玉欄女は打

驚き。【詞】味方の武士を手にかけしは。様子有げな此場の時宜。所存いかにと詰寄ば。顔つれ〴〵と打守り。【詞】いかい御苦労遊はしたのふ。此園菊お前の為。現在孫でござりますはいなァ。ヤァくく何と。サヽ御不審は御尤。一通り物語らんとしづくと。座を定め。【詞】扨も此度三韓攻は。末世の規模と諸大名。其家々の郎等迄。武勇を争さふ晴軍。思ひも寄ず夫に代り。

此三韓にとゞまるは血筋の縁の引条と。しらずはからず慶州へ向ふもふしきの奇縁にて。

（81ウ）

なんなく國を打破り。【詞】噂に聞たる紀将軍晋伯公を討取て。よくくお首を実検すれば。兜に残る此一書。御身の孫と身の素性。始て知た園菊が父は仙石権兵衛様。其印しこそ千鳥の香炉。伊勢海道の野の末に捨子と成た氏景圖。父は仙石何某と聞た養母の物語。身に凶事有は啼といふ香炉の割符に廻り合。祖父共明さず此園に高名手柄さし給ふも。姫君王子の御身の上。頼まん為とは云ながら。血脉の縁は此様にも。可愛いものかと打歎けば。【詞】ヤァく扨は最前印璽をば。落して置たもこなたの情。祖父の義理に此場をば見遁す心で有たるか。扨は噂に聞及び恋しう思ふた孫で有たか。アレなつかしやと取縋り。見上見

（82オ）

下す唐日本。真実真身の血脉の縁。ふしぎといふも餘り有。何所に忍び居たりけん山口軍蔵飛で出。【詞】ヤァ園菊が二心見届たりといふ間もなく。どうど打たる鉄砲の響きと倶に軍蔵は。ふすぼり返つて死てげり。障子をさつと押開き。鉄砲弓手に加藤正清。実三韓の鬼舎丸と勇名秀し。其出立。園菊はつと驚けばヤァく旁騒ぐまい。【詞】此正清裏道よりとつくに入込窺ふは。慶州にて討取し晋伯が兜のうち。一書を得たりと聞しかど。つゝむは子細有べきと思ひ合すは昔頃。都高臺寺において相果し仙石権兵衛が最期の様子。日本より告来ると割符を合す千鳥の香炉。但しは敵へ内通かと砦を預け探り見るに。敵へ内通なしたるは思ひ

（82ウ）
も寄ぬ山口兄弟。春町が兄成故心をゆるせし我不覚も。天道助給はずして監物は汝
に射られ。軍蔵は此正清が討て捨しは三軍へ。不忠のいましめ加藤が軍令。それに引かへ
汝が忠節。據なき祖父の頼み恩義にせまり姫王子を。一旦此場を見遁して日本への
言訳には。とつくに腹切居よふがなと。黒星遉明智の一言。肝先ぐはらりと押開けば真
一文字に切たる上。くる〳〵巻たる白絹も。から紅の覚悟の深手。ヤア其有様はと驚く
玉欄。【詞】ヤレ祖母様お騒ぎ有なと。苦しき息をほつとつき。【詞】貴田孫兵衛宗春は。三韓におい
て討死のしるし有と博士の詞。夫に代り死るとは。三年前に極た覚悟。祖父の遺言立る
（83オ）
とはしらず計らず大明より。送つた額の難題を讀せてたへと彦山へ。捧し此身は日本へ。忠義
もたつた一つの命。三方四方にからまれし恩と妹背と忠孝に。分た此身は此世の本
望最早。思ひは残らねどたつた一つは日本に。残る夫と云兼てこたへるつらさ骨肉をしぼる
計の憂思ひ。心を察して正清も。日月のことき両眼より涙をはら。〳〵〳〵と浮ふれば。玉欄
女はせき上〳〵ヲヽ道理〳〵尤じや。【詞】夫を慕ひ石と成女は其身の徒から。唐と日本の親
夫お主への忠。祖父祖母への義理も順義も身一つで。分た節義は末世の手本。烈女傳
の追加にも。恥かしからぬ初孫がはる〴〵隔た海山越。死る今際に顔見せに来たのは何
（83ウ）
の因果そと心の限り。かきくどく。三人の涙六つの花千里が野辺の。一同にとけて。流るゝごと
くなり。猶豫は未練と園菊が既に腹帯解んとするをヤレ待園菊。知命に及ぶ今日
迄戦場に武勇を争ひ。哀れといふ事知ざる正清。初て涙をこぼせしもそちが忠節感ずる
余り。此三韓の姫王子某預り帰朝して。此正清が功にかへ再び此土の主となさん。コリヤ是を

未来の祖父親へ。土産にせよとの一言は。百万石の恩賞共云ん方なき加藤が仁心。

園菊苦しさ打忘れ。エヽ有がたいく。コレく祖母様。三韓の国主と。王子を再びあをぐ事

正清公の御情にて。此三韓は日本より改め貰ひし同然たれば。此後貢怠らず真柴の

（84オ）

武将継目の砌。慶賀の来朝有べき様。傳へて違へ給ふなと。詞は末世に連綿と。たへせぬ

貢来朝の由来は斯とぞいちじるき。正清勇んでヤアく旁。【詞】斯迄此地平均すれば最早

とゞまるいはれなし。釜山海に待請たる諸侯の舟へ帰朝の旨。いざ知せんと用意の狼煙

庭の面。もへたつ炎紅ひの衣へんぽんと高天に。上るとひとしく吹そらす。早凱陣の螺

の音。櫓拍子の音ゑいさつさ。ゑい〳〵さつさと船子共。迎ひの。乗船漕寄れば。祖母は泣

〳〵是のふ園菊。【詞】斯云事がないならばそなたも倶に出船の。目出たき数に入ふものと

果し歎きを見捨るも。勇者のならひと正清は。姫君王子を是へと請し。直に乗船

（84ウ）

暇乞。悲しい旅立目出たい帰朝。羨しげに見送れば。たまらずかけ寄玉欄を。とゞむる正

清諸共に。涙は胸に満汐に連てこぎ出す此世の別れさらば〳〵〳〵〳〵といふ聲も次

第に遠く。隔たる船見送りく延上れば。先手の舟は釜山海。早乗出す数千艘。残ら

す諸家の籏指物。追風にひらめく有様は目覚しくも又【三重】はなぐし。数多の帆がけ沖

合に。見へつ隠れつ。斯舟を。ひれふる山と恋慕ふ。園が哀れを末の世に。貴田孫兵衛が討

死と残る。憂身の血死期時。腹帯とけばがつくりと。嵐に向ふ花芙蓉はかなや。おしや

八冊目

（85オ）

松に成たや男松に成て。此住の江に育たい。女護の嶋へ往た心。爰住吉と。名に高き。

岸の。姫松色めきて。いとかう〳〵たる鳥井先。参り下向が立留り。【詞】何と皆の衆。朝夕に見れば

こそあれ住吉の。岸の向ひの淡路嶋山。どふもいへぬ景ではないか。ヲ、そふ共〳〵。此様においらが太平の御代を楽しむも。皆久吉様のお蔭。コレ必仇に思やんな。もし又あなたがなふて見たがよい。そりや爰にも軍かしこにも合戦と。常住逃てばつかりいにやならぬ。ヲそふでごさる共。それに不思義な事が有。此鳥井先に。大きな石が有。此石の傍へ寄しやるなや。ムウ何と仕ますの。サア其石の上を。鳥でも飛と忽死ますげなの。それで去学者に

（85ウ）

尋ねたらばマア聞しやれ。此度唐の軍に。大分唐人の耳を取て来たけな。其亡念の石じやといの。ヲ、それは恐ろしい事いの。アノマア久吉様は何たる強い人で有ふな。サアどふでも米やか油屋にでも。奉公仕て居やしやつたかして謀がゑらいげな。そこで日本が攻さらいで唐土迄攻取器量。何所の国か草履取からたいとう様に成上るとは。ア、コレたいとうじやない大領じや。ヲ、それ大領。たいとうとは赤い米じや。其大領様をたいまいの櫛じやと云ぞや。ソリヤ又どふして。ハテ朝鮮か寄付れぬ。ハ、、。イヤ転合いふて居る中に。日脚も腹も跡へよつた。ござれ〳〵と打連て住家へ〳〵立帰る。爰に名高き商人は先祖代々堺の津に。仕にせも

（86オ）

古き薬屋如清。白砂蹴立歩み来る。供は栄有男ぶり名も。吉助がりゝしげなおちよぼからげに菅の笠。丁稚が提し。風呂敷の堤を。さして急ぎ足【詞】申〳〵御隠居様。ちとお休なされませぬか。お年に似合ぬ早いお足と。いふに如清が立留り。【詞】エ、嗜みや〳〵。堺から此住吉。たつた一またげはかない所を何じや休め。休んだとていたい足が直るでもない。わしに付てそろくおじやと歩みかゝつて。【詞】イヤ待やゝ。わがみ達の様にしんどい〳〵

と思ふて歩行と。マア草履が損ね腹がへる。コリヤやつぱり休んで行たが勘定じや。何所ぞ銭の出ぬよい所が有そふな物じや。ヲット有ぞ〳〵。幸いな捨床几。サアく爰で一ぷく

（86ウ）

せいと。腰打かくれば吉助は。腰さげより燧取出し。打んとするを。【詞】ア、コリヤ其様にほくちを遣ふ

てたもるものか。壱文から始末せねば。大金は延されぬ。それはそふと吉助。わがみは神仏の前へ行と。半時程拝んで居やるが。アリヤマア何といふて拝ぞい。ハイ私が拝まするは。親方が随分繁昌仕ります様に。ヲ、ソリヤよい心がけじや。が繁昌も金の出来るのも。神や仏の知しやつた事じやない。随分理屈のよい事を油断せぬが第一。イヤ其理屈のついでに。昨日そちが咄しに。耳寄な奉公人。あつちから給銀持て来る者が有じやないか。ハイ昨日左様。申ましたら。抱よふとおつしやる故。今日此住吉迄連て参らふと。肝煎と相對

（87オ）

致して置ました。が参しますれは一筋道。大方爰へ。イヤ人事いはゞ目代置。アレくあそこへ肝煎が参りました。アノ女が大方そふと吉助が。詞は耳寄ちつとの間。待も勘定十露盤のけたをはづさぬ親父なり。妻乞鹿の身の果は。恋の文書筆となる

人の流れは白菊が。今はお菊と人目をば。忍ぶ夫に逢たさに。肝煎嚊にいざなはれ。来かゝる此場吉助を。それと見るより飛立風情。吉助はそしらぬ顔。【詞】ヲ、肝煎殿待て居ました此女中が此間咄しさんした。アノ給銀持て来る奉公人じやの。ハイく左様でござります。と。いふに如清は打見やり。【詞】ムウ先恰好よし。器量よし。何よりは給銀を持て来るとは。

（87ウ）

マア第一に気に入た。マア半季勤て見たがよい。カこちの内は大躰楽な内じやない。朝は明六つから起すかはり夜は夜半迄夜なべさすは。ハイく結構な内方。時に此肝煎への礼銀は。あなたから出ますかな。ハテめつそふな。給銀はそつちから持てくれば。礼銀もそちからせいでは。いか様おつしやればそれもそふかい。イヤそふじや所が。其代りに気に入たら。末では筵敷。其時は又極めが違ふ。四季の仕着せも其時は皆。そつちからせにやならぬぞ。ハイそれもそふかい。時にそんなら鉢や皿割た時はどふなされますへ。ヰヤ鉢や

皿わつたら。奉公人の給銀で引が。大躰親方のおさだまり。ェ、あなたの方へおとり

（88オ）

なさるゝからは。鉢一つ割たら何ぼ。皿一つ割たら何ぼと。給銀の内で引ますぞへ。イヤくソリヤ

そふはならぬ。ハテきついといふ内ではなし。皿や茶碗を割たのも。そちから算用せにや

ならぬ。イヤそれはそふと肝心の。本主はどふじや。さつきにからいふた事皆合点かと

尋れば。お菊ははつと手をつかへ。【詞】ハイとんなせつない奉公でも。あのお方と一所に居ること

なら。千年も万年も。必々お見捨なふと。じつと見かはす目の中に。互の恋やと

もるらん。如清は何の気も付ず。【詞】ヲ、そつちさへ其気なれば。爰から直に連ていのふ。コレくコレ

吉助。何をきよろく。かむりふつたり黙頭たり。何のこつちや。ェ、ハイ是は。是はとは。ェ、是はヲ、

（88ウ）

それ〳〵。長吉めが高燈籠を見て背高嶋の辻堂かと問まする故。イヤくそんな

者じやないと申て。かぶり振ましたのでござりますと。云紛らして。【詞】サァく女中。直にこちの

内へござれ。アイくそんなら肝煎様。爰から直に行ますぞへ。ヲ、荷や何かは跡からやる。結構な

親方じや。コレ随分機嫌よふ勤て。藪入にはしつかりと。土産頼とほやくきけん。追従たら

〳〵肝煎は。大坂さして立帰る。跡打詠め如清は悦び。【詞】マァく是て落付た。コリヤ吉助。出た

次手におりや新家へ。此間の銀の催促に行ねばならぬ程に。我は是からアノ女子

連立て先へいにや。サ、早ふ〳〵。イヤ申旦那様。もふ日くれ前てござりまする。明日の事に

（89オ）

なされませぬか。但しは私がお供致しませうか。イヤく供する迚たらば出来ぬ。履物が損ね

ちやつといにや〳〵。コレ女中こなたも早ふ往て。夕飯の茶粥も焚て置しやれ。コレ堤たんと入

まいぞ。早ふ〳〵といら立の。主の心を破らぬ吉助。そんならお先へサァ女中と。餘所に云

なす妹背鳥。翅隠して急ぎ行。【詞】コリヤ早ふいねよ。ェ、もつとしやんくあるけいやいと。いひつゝ

見やる鳥井のこなた目に付石。【詞】ほんにそれよ。屈竟の庭の飛石。人歩をかけて取寄しに。

鳥井の先は壱寸も動かぬと有此大石。ふしき〳〵と立寄ば。奇代のざつきに薬屋如

清。うんとのつけに倒れ伏。深編笠の浪人姿来かゝる此場。石面は。影かあらぬか

（89ウ）

李如松が。形はあり〳〵心得ずと。窺ふ判官。小柄の手裏剣。半に留て【詞】ハヽ、。随身味方の我成ぞ。必怪しむ事なかれ。何か何と。ホヽウ不審は尤。某こそ三韓の李如松といつし者。六助といへる匹夫にたばかられ。娘諸共命を失ふもとはといへは。重る恨の真柴久吉。其方が逆反の胸中我かうつうに察せし故。魂魄如清か體を借て。汝が刀とならんかいかにと。五臓を見抜一言に。同腹中の岸沢判官。【詞】扨こそ〳〵聞及ひたる三韓の李如松。無念の魂魄此土に渡り。久吉に恨有とは。我大望によき片腕。先達て某か盗置たる日月の籏。高臺寺にて久次が。我を助置

（90オ）

たるも。籏の詮義をなさん為。まだ大望の味方にほしきは小西行長。ヲヽそれこそ如清の體を借。味方に付るは彼が孝心。其上異国征罰にて。正清に先陣をせられし小西行長。無念の底意なくて叶はぬ。そこを付込親がいに。味方に付るは案の内。ヲヽ潔し〳〵。万卒は求安し。一将は得がたし。行長味方に加らば。龍に翅を得たるの心地。我手に有てあぶなき御籏。暫らくそちに預け置と。渡せば取て気遣ひ有な。【詞】ヰヽくつきやうの隠し所。堺の浦の唐船に碇をもつて沈め置ば。いかなる力量勝れし者も取上る事思ひも寄ず。又其上に術を以て。一つの妙薬浦にひたし行長にあたへなば。心乱れて

（90ウ）

味方は必定。ホヽ妙計〳〵久次めをしもふて取。科は則拵へ置。久吉を調伏の形代を以て。當世の松の根に埋。是を以て彼に切腹。出来た〳〵。誠の如清も事ならば。體を仮の此李如松。先それ迄はさらば〳〵といふより早く。ばつと立たる煙につれ姿は消て以前の石。心付たる薬屋如清。手に持御籏立寄判官見合す顔。【詞】岸沢殿とかく大事は此御籏と取納めたる面色は直に李如松。落着判官。【詞】是より直様貴殿の宅へ。万事の密計は隠居の間。いざ同道致されと。しめし合して両人は打連てこそ急ぎ行。始終後に聞居る曲者。松影ぬつと石に目を付。合点の行ぬ今の有様。水に音有石にせい有。ハテナ。石に魂魄

（91オ）

とゞまる事。我朝にては那須野の野狐。又神代には打石を拍と傳ふる軍の勝利。方角は

東に利有。西より仇なす此石形。よく〳〵見れば蟇の姿。ヲヽかびやが下になく蛙。飛で火に入夏の虫。

愚にもハレ怪しやと。跡をしたふて【三重】行空の

九冊目

一人貪戻なれば一国乱をおこすの基。いかなる事にや久次公此頃御心たけぐ敷。悪逆日々に

盛んにして父大領の御怒り。押て預る行長が。館を仮の御座所。屋敷は一つ交りは隔つ切戸

の此内へ。武士入事をゆるさずと書たる石は角なれど。天窓は丸い父如清仕似せた商

賣薬店見一。無頭さつ〳〵と。あたなは奴がはき掃除。こなたは手代が帳合の。〆高しやんと

（91ウ）

大あくび。【詞】ナント嘉兵衛どふ思ふ。世の中にふしぎも多いが。旭蓮社の二股の蓮の花と。昨日来た

下女のおきく。何所の国にか奉公人の方から給銀持て来るとは。密夫が三百目取様なせん

さくじやないか。さればいやい。まだふしぎない旦那殿。下地のしはい上に此頃の強欲。それに引かへ

若

旦那は。れつきとしたお大名。親子の中でも此様に。商賣の違ふ物かいのと。こなたの咄し筒抜

の。隣に奴が聞耳立。【詞】ナント可内。あちらの内でも旦那の噂。ふしぎといふはこちの大将久次様。

聖

人の様に云たお人が。俄に悪い工みを仕て。親御様を調伏とやら半ぶくとやら。異見する者は

直にお手討。とんと気違ひの様じやげなヲヽサおらもそふ聞た。しかし其短気者も。旦那小

（92オ）

西様のおつしやる事は。お聞入か有そふで。親御様から預つてこちの屋敷のけない人。何そと云と

切つはつつ。おいらも首の飛ぬ内宗旨をかへて。町人にても成ふかい。ヲヽそれく。何をいふても命が

物種。親旦那の如清様に願ふて。手代と奴と入かへて貰ふかい。ヲヽコリヤよかろと立かゝる。こなた

の手代がどつこい〳〵。【詞】そふはならぬそ。其建石が目にかゝらぬか。武士とさへ名が付ば此内へはいる事のならぬ掟。破れは忽首が飛ぞや。ム、そんならそこへも行れぬか。ハア、しもふたと顔見合せ。天窓角内可内も。しよげり入たる折こそ有。お旦那のお帰りと下部が告る聲につれ。なむ三お目玉貰はぬ内。部屋で休もと両方か。とはかは立て入にける。満れは

（92ウ）

隠るゝと世の諺。むへ成かな小西行長。聚楽御所より立帰る胸もときつく夕闇に。心の月も打くもる。枯木の松を家来に持せ。しつ〳〵帰るくつたく顔。襠姿しとやかに。妻の秋篠出向ひ。【詞】いつにない遅ひおさがり。シテまあ御前のお首尾かへ。されば其事。日月の簇紛失といひ。子として親を調伏の悪逆。まつたく佞者の所為と思へど。久次公御自身の白状といひ。此頃つのる無道のふるまひ。大領公の御いかりつよく。よう〳〵萩の臺の御れんみんにて。しばしの猶豫も今宵の三更。それまでに御簇の行衛。御申わけなきにおいては。久次公は御切

（93オ）

腹。検使は則加藤春町。追付是へ来る筈と。聞て恟り膝すり寄。【詞】夜半といふもふ追付。もし申訳なき時は。弥お前は久次様に。ホ、御切腹をすゝむる所存。ヱ、。ヰ其切腹はコレ此鉢植。日外うすきの神職より。献上したる常世の松。枯しを祝せし曽呂利が狂哥。御秘蔵の常世の松は枯にけり。ナサとくと工夫を致して見よと。思案を松の鉢植に心。残して入にける。跡に秋篠只一人とつつ置つの案じ顔。【詞】合点の行ぬ今のお詞。御秘蔵の常世の松は枯にけり。ム、其下の句は。ヲ、それ〳〵。常世の松は枯にけりおのが齢を君に譲て。ム、扨は久次公の御申訳。代つてお腹召お心よな。ホナ。はつと計に狂哥の謎とけて。くるしき

（93ウ）

胸の戸も。ふさがる心地。こなたの障子。開く情の花盛り。下女のお菊は吉助が。袂をじつと恨み顔。【詞】そりやあんまりじや采女様。都で別れてそれよりは逢事さへも定めなき。

身は住の江のうらに舩岸を放れて便りなふこがれ〳〵し念届き。お前と一つに爰に居
て。馴ぬ水仕の奉公も。心は女御后にもはるか増りしるよふじやと。思ふて居るに胴欲
な。むごいつれないお心と。跡は涙に白菊の雨にうるみし風情なり。采女は道理と背
撫さすり。【詞】こなた故に浮身を流した此瀬川。さら〳〵心はかはらねど。合点行ぬは此家
の如清。善悪分らぬ其内は。我名は元より身の上をけどられまい為計。必恨んでたもん
（94～100オ）
なや。サア其言訳が定ならば鬼の来ぬ間に命の洗濯。ござんせやいのと取手を拂ひ。
めつそうなと逃歩行。千話や口舌の面白盛り追つ追れつ吉助が。息も切戸を外から
ぴつしやり。音に驚き見合す秋篠。【詞】ヤア采女様。ア、コレく奥様。めつたな事をおつしやるなと。
いふ聲聞て猶豫ふ白菊。秋篠心に打黙頭。【詞】成程こなたは薬屋の下人吉助。ちと自が
折入て頼たい事が有。何と爰へ来てたもらぬか。エ、めつそうな事おつしやりませ。武士たる者は
一人も。這入事のならぬ此建石。そこへ行たら旦那のお目玉。ヲ、こはやの〳〵。ホ、、あの人とした
事が。そつちから建た其建石。町人出入ならぬといふ。こつちに掟はないわいの。いか様こりや
（94～100ウ）
御尤。隣とは申せ共御内縁のお主筋。御用と有ば何成共と。跡先に心を配り。いんぎん
に両手を突。【詞】シテお頼とおつしやるは。ヲ、自が頼みといふは。外でもないまつかうと。懐剣ぬく
手をしつかと押へ。【詞】ヤ待た。久次公の申訳。科を引受切腹致そふ。ヤ何と。ハテこなたにも存じの
通り。いつぞや都高臺寺において不義顕われ。御成敗にあふべき命。助られしは久次公の
御仁心。町人と成心を砕くも。何卒御簾の詮義して。再び帰参を願はんと思ふ折から此仕
合せ。願ふてもない某が一命の捨所。一時も早くサ、、お役に立て下されい。ホ、ヲ遖忠
臣采女様。夫の命かばふのも。久次公を御本心に。なしましたいばつかりに。サア介錯頼む秋篠
（101オ）
様と。傍成懐剣取上る。のふコレ待てと白菊が走り寄て縋り付。死ば一所と兼ての約

束。お前を先立何とせふわしから先へと引取懐剣。それはと留る秋篠采女争ふ中へ
久次公。ずつと出て懐剣もき取。【詞】ヤア自身に親を調伏と白状したる此久次。儕等ごときに
言訳を頼むべきか。じやと申て太切なお身の上。まだ〳〵ぬかすか慮外者。殺すは殺
生コリヤ斯と手早に下緒のいましめ縄。縋る白菊刎のけて引立一間へ入給へば續ひて
秋篠白菊も引そひてこそかう〳〵と。早告渡る三更の。鐘は冥途の呼づかひ。
入来る検使は春町と。姿に咲す襠さばき。斯と案内に秋篠は。衣紋つくろひ出向へは。
（101ウ）
上使なれば通まする上座御免と座に着は。【詞】是は〳〵春町様太切なお役目。御苦
労に存じますと。挨拶すれば異義を正し。【詞】兼ての不和も三韓からとけ合た。両家の
ちなみは私事。満所のお心を込られし。枯木の松を判談有て。弥御用意なされたか。イヤ
其義においては気遣ひ無用。とくより用意仕るし。立出る行長か今消果る身の上と。
極めし覚悟の白装束。見るより恂り秋篠が。【詞】ヤア扨はやつぱり申訳にハア。はつと計に取
乱す。【詞】ヤア未練の歎き見苦しい。コリヤ。さ〳〵此行長は三韓の先陣にかくれ。既に腹切死る命。
けふ迄存命居たるはな。正清が一言尤と思ひし故。頬押拭ふて帰朝せしも。一つの功を
（102オ）
立んぞと。思ひ込たる我胸中。萩の臺にはしろし召れ。枯木の松を給はりしも。【詞】おのか千年
を久次公に。譲れよとの御謎は。此行長が武士道を立させん御情。末世に誉をかゝやかす。
漢の紀信が忠列と。同じ冥途の門出に。不吉のほへ頬いまはしい。【詞】ヤアく誰か有。申付
たる短刀持と。気色を正し検使に向ひ。【詞】春町太義。関白久次か調伏の願文言訳立ず。
只今切腹仕る実検致せ。ハツ御心中察し入ました。御遺言もあらば申置れ。お心しつかに
御用意と。忠義の誠くんて取。胸の涙を目に見せぬ。検使も立派。覚悟も立派。すてに
短刀取直す。【詞】アレ暫くと隣より。如清は用意の銚子盃。両手に携へしつ〳〵と検

（102ウ）

使の。前に畏り。【詞】憚りながら御検使入如清か願ひ。一つ屋敷も隔たる。親子が一世此世の別れ。暇乞やら見納めやら。何卒名残の盃をと。跡は詞も涙聲。春町心を察しやり。【詞】御親子の御別れ御尤のお願ひ。せめて末期の盃は。此春町がお取持と。其場の器量見せたるは遉加藤の。妻ぞかし。行長は謹で。【詞】親人の御盃。御検使のお情。イサ頂戴致さんと。いふ顔如清は打詠め。【詞】何と忰。サ是じやによつて平生から。侍をやめにしてくれいと頼んだは爰の事。町人に成ていられば。今の難義はないわいやい。片意地をいひつのり。其身計か年寄た。此親に迄歎きをかけ。【詞】忠は立ても孝にならぬ。忠臣は孝子の門より出る

（103オ）

とな。忠孝の全きを誠の武士といふわいやい。【詞】成程仰御尤にはござれ共。忠義に先立不孝の段は御赦免有て別れの盃。女房お酌と夫の詞。涙ながらに取上る。長柄に。あらで。親と子が。短いゑにし酌かはす酒は秘法妙薬の。廻れば忽変ずる相形。如清は盃はたと捨【詞】親に先立不孝者。傍に居るもいまはしい。行長さらばと立上り。走り入たるこなたの一間。倶に付添妖術と。しらぬ春町秋篠も。如清か振廻あきれ果暫し。詞もなかりしが。秋篠は夫に向ひ。【詞】舅御様の御願ひ。親子御の別れの盃。御検使のお情にて。調ふ上は。此世の名残わたしが未練。どふぞ末期の盃を。【詞】ホヽヲ御検使御免有上は早く。〳〵といら立

（103ウ）

知死期。持来る三宝蝶花形。昔妹背のかためして契り。千代もと祝ひしも。今は仇成。花の縁。花のゑにしとちりて行。未来をかはす。盃の。数は暫しの憂名残。ロさ有がたいと行長が手酌に引受つゞけ呑。コレ何事ととゞむる女房。顔をじろりと。とろ〳〵目。面白い〳〵。今此酒で思ひ出した一昔。そなたは遠里といふた全盛の時。高砂の尉に成迄と云かはした事も有たが。大名に成て痛い腹。切ふとは思はなんだわァヽコレ行長殿。あれに御検使ハテ扨。春町殿が聞て居られふが。行長が成立は泉州堺の木薬屋。大名に成た不仕合せで。腹切も宿縁しよ事がない。何と。未来の土産にそさまの一曲。

（104オ）

サ所望くとほのめけば。【詞】ェ、コレあられもない。常とは違ふ春町様は今宵の御検使。イヤ検使忘れはせぬ。お赦し有た暇乞。だんない〳〵。ソレ妙共。三味線持と騒がぬ行長。テモ優長なせんさくと目引袖引妙が。取次三味を秋篠が。涙に糸もあやぞなき。にくからぬ。物とていとゞわびしきは。ひとり詠むる閨の月。草の庵の夜の面。折から表へ虚無僧の。竹に別れを一よぎり。夢計なる手枕に。下着に残る。移り香。【詞】よふ〳〵きやうとい物く。ア、末期の水が廻つたそふな。山寺の春の夕暮来て見ればハ、、。たはいやくたい。崩る、有様。春町は詞を正し。【詞】御酒の廻りか但しは又。誠の武士の最期の際は。ヶ様な

（104ウ）

物でござるかなと。励ます詞表より。【詞】切腹御無用何が何と。ホ、ヲ其子細申聞ん。先暫くと打通る。虚無僧姿をふしんの春町。【詞】久次公へ忠義の切腹。とゞむるそちは何者と。いぶかしながら詰寄ば。【詞】ホヲ、大領公より久次公御赦免の御教書。頂戴有て然るべしと。笠脱

捨れば。【詞】ヤアそなたは孫兵衛此形はと。尋る内に行長が心詞も。小凄き顔色。【詞】ヤア儕仇有六助匹夫。爰に来りし奇悔やと。異相の眼尻宗春が。胸にこたへて打守り。

【詞】ハテ心得ぬ。小西行長殿ならば。貴田孫兵衛と有べきに。我を見るより眼色かはり。儕仇有六助匹夫と。憤り有詞のはし。ム、扨は。日外唐土関帝堂に亡びたる。李如松が霊

（105オ）

魂。小西が五躰を借しよなと。ぞつこん見抜眼力に。様子あらんと猶豫ふ秋篠。行長やらぬと春町が。付入懐剣かいくゞりひはらを一當宗春が。うかつによらば春町に虚事やあらんと行長に。眼を配る三方四方。小四方ぱつしと踏砕き。【詞】父父たらねば子も子たらず。馬鹿をつくす久次殿。赦免とあれば此行長が死るに及はず。親人のすゝめに随ひ元の町人。侍やめて女房も去こくると。とゞむる秋篠はり飛し。

見向もやらぬ大膽不敵。秘方の酒か薬屋の。内へかけ入行長につゞく切戸を。はたとしめ。

【詞】武士此内へ入事を赦さぬ建石。侍捨て町人に成た弥十郎。立引あらば何時でも。

（105ウ）

引ぬ男じや待ていると■くれ立た町人の。気質を見せて入にける。気も春町が起

直り。何所迄もとかけ出す。【詞】ヤレ待た春町様。久吉公の仰を請姿をやつす横眼の某。

三韓より帰朝して心を付る李如松が。住吉でのふしきといひ。御簾は慥に唐舩の。碇に

有と聞しかど。今又小西が一言にて。身動きならぬ此館。お傍はなれず久次公の。御守護

申す此孫兵衛。ヲヽソリヤ春町も行長が。所存の実否探らぬ内は。君に付添ふ夫の名代。

イサ御一所にサアおじやと。かけ行主従とゞむる秋篠。アヽコレ申お二人様。【詞】久次公へ面ぱれに。所存

探るはわたしが忠義。せめてそれを功にせにや。君を始めいづれもの思し召も恥しい。じや

（106オ）

といふて連添お前。サアお聞の通り去れた夫。不所存に極まらば。未練は残さぬ

お主の為。ヲヽそれこそ望む武士の本心。町人の魂と打てかはつた人でなし。善と悪と

が生死の境。其お返事を。待て居ると。切刃するどき。諸刃の切物鯉口つがひ奥

に入。気は半乱の秋篠が。エヽ情ない夫の心。去たとは胴欲な。久次様はあのお身持。誰を

斯との便りは御隠居。そふじや。〳〵と身づくろひ。かけ込向ふへ如清は立出。かけふさがつて。

【詞】アコレ。去れたそなた此内へ。はいる事はマアならぬ。去ながら。忰に切腹さそふとした久

次が首。切て来たらばそれを功に。今迄の通り嫁舅と。励しき詞に消入思ひ。【詞】エヽソリヤ。

（106ウ）

道ならぬお気強い。人の命は朝顔の露よりもろき世の中に。恥といふ字は幾八

千代椿の春はつきる共。消る時節はござりませぬ。友白髪迄云かはす。現在女房

が口出して。親夫をば非義非道と。いはれう物か爰のつらさを聞分て。夫に異見を

コレ申。お慈悲〳〵と手を合せ真実真身の。血の涙貞女の。誠をあらはせり。【詞】ァ聞とむないよまい事。あたやかましいと言捨て。歎く秋篠目もやらず。つぶやきく入風情。揃ひも揃ふた大悪人。あんまり気づよい胴欲と。垣にひつしと身を寄て恨み涙に。伏沈む。返らぬ歎き散花はちりて。すゞしき名をとゞむ。【詞】ちればこそいとゞ櫻は目出たけれ。

（107オ）

浮世に何か久しかるべき。花の散しを目出たいと。讀し心は称美して。折取るゝを誉たる詞と。見廻すこなたの鉢植は。【詞】御秘蔵の常世の松は枯にけり。おのが齢を君にゆづりて。ヲ、それよ。満所への申訳。いつそ我身を。いや〳〵〳〵。孫兵衛殿の物語。久次公の御身の大事。そふじや〳〵と胸をすへ。奥の間さして伺ひ行。人なき透を見すまして。如清が居間より小西が館。兼ての抜道井筒より。ぬつと出たる判官信親。目針しめして差足抜足。忍び入たる大将の寝所は爰と押明て。仕すましたりと御首を。はつしと打取たぶさをくはへ血刀引さげ立出る。跡より伺ふ貴田孫兵衛。曲者

（107ウ）

待てと組付を。早足の早業李如松が。奇術にけしとむ其隙に。何なく井筒へ遁るゝ信親。なむ三宝と孫兵衛が續いて入んとする所に。とくよりこなたに行長如清さらへとゞむる間もなく。兼て所持せし大蛇。手にからまいたる孫兵衛に。親子ははつと気を奪はれうんと如清が悶絶に。正気付たる小西行長。【詞】ャア其方は貴田孫兵衛。ホヽヲ忽人相すこやかに。孫兵衛と知れし上は。夭魂去たる行長殿。スリヤ親人はと引起す。目先へ黒蛇を突付く。【詞】去三韓征罰の時。関帝堂にて亡びしと見せたる李如松。小西如清が骨肉へ分入たる事とくより知。早く夭魂立去と。

（108オ）

勇気の詞に對馬守。【詞】最前親子別れの盃。其酒咽を過るやいなや。心乱れて有けるが。扨は奇術のなす所か。につくき蝦蟇障化の業早く此

場を立去と。詰よせ詰よる智者勇者。いつかな屈せぬ高笑ひ。【詞】ハヽヽ。遉の宗春よく見付た。斯露顕せし其上は。早首討よ行長と。首差延れば小西が當惑。貴田孫兵衛も猶豫の内。如清か胸より飛行の心火。消る

と見ゆれは李如松が。姿ありく倒るゝ如清。寝所の障子押開かせ。三韓王子をいだける久次送りの。音楽諸侯の答拝。春町秋篠連て。粧ひ

（108ウ）

顕然たり。遉の李如松驚く面色。大将御聲高らかに。【詞】李如松が敵對は古主の仇を報はん忠列。義心にほこつて三韓を再興有。父久吉公に弓を引は。彼猛虎を恐れ足下の毒蛇にかいせらるたとへのことく。虎は平生の造悪ざいごう。毒蛇は則ちとくのごとし。王子を斯守立る。真柴の仁政李如松に。孫兵衛語り聞せよと。御諚の下より貴田宗春。差添引抜我髻ふつゝと切は驚く人々。孫兵衛如松に打向ひ。【詞】王子をかへし三韓を立らるゝ。我君に恨は有まし。さいつ頃某か縁を組だる蘭麝か最期。また其以後討死せし。貴田孫兵衛か菩提の為。三には

（109オ）

母の御吊ひ。一つの庵を毛谷村の邊りに結ふ宗春法師。アヽ心安や嬉しやと。一句に感ずる李如松が。【詞】今より王子の影身に添。政事の助といふ聲計。雲に残つて忽然と虚空に。飛去失けれは。跡にうつとり気の付如清。【詞】そちは行長孫兵衛殿。久次公にてましますかと恐れて三拝御大将。【詞】夭魂去し上からは時を移さず王子の見送り。せき立内にも国家の怨敵。岸沢判官見参やつと。呼はり給へはこなたより。顕われ出たる判官信親。首引さげて無念のはがみ。【詞】夭術くじけ李如松は立去共。久次か首取は本望と思ひの外。瀬川采女がくたはり首。方便に乗たる奇悔やと。足下に蹴飛し大音上。【詞】信親か死物狂ひと。

（109ウ）

兼て仕廻し相圖の狼煙。数多の軍兵ばら〳〵。中に挟んて取巻たり。【詞】ヲヽ出かすく。異国以来納めた刀。小西か抜ぞめ孫兵衛は。敵を未来へ出家の役と。抜つれく切まくられ。逃行多勢を御大将。如清女中も一様に遁さしやらしと【三重】追へて行。飛かける天のつり舟それならで。太子

を見送る御大将。兼て用意の唐船を。堺の浦にかざり立。綾の幔幕翻す供奉の。音楽御傍に。姫宮玉欄守護する折から。岸を傳ひに岸沢判官御船を目かけ飛乗て。【詞】ヤア日月の御籏もなくて和韓に威勢をふるはんとは愚の久次。覚悟せよと呼はれば。【詞】イテ其御籏を引上て御手に入んと。真綱たくつて宗春法師。御座の艫先へつゝ立て。数百竹の大碇安〳〵とかつ

（110オ）

き上。ふんぢかつて立たる有様人間業とは見へざりけり。正清は勇立。碇に付たる箱取々御籏をさつと押立れば。判官こらへず飛かゝる。後へぬつと小西行長。判官をどふどのめらせ高手小手にしめ上〳〵。【詞】主に敵

たふ大罪人御父君への手土産と。小西か勇に御大将つれて御悦喜限りなく太子を恵の仁愛に。

行末永き御代久次。国家安全祈るなる。孫兵衛入道八道の三韓陣に誉有小西加藤と今の代迄。音に菊桐

武門の栄へ東に當る日の本へ。萬国よりの貢物盡せぬ稲の未ばへ。申の年越

繁昌は。手はじめもよき大功の。艶書合の言の葉を語り。傳へてことぶきぬ

天明七丁未年十月十九日　作者芝屋芝叟　千代古道